

和洋
普通

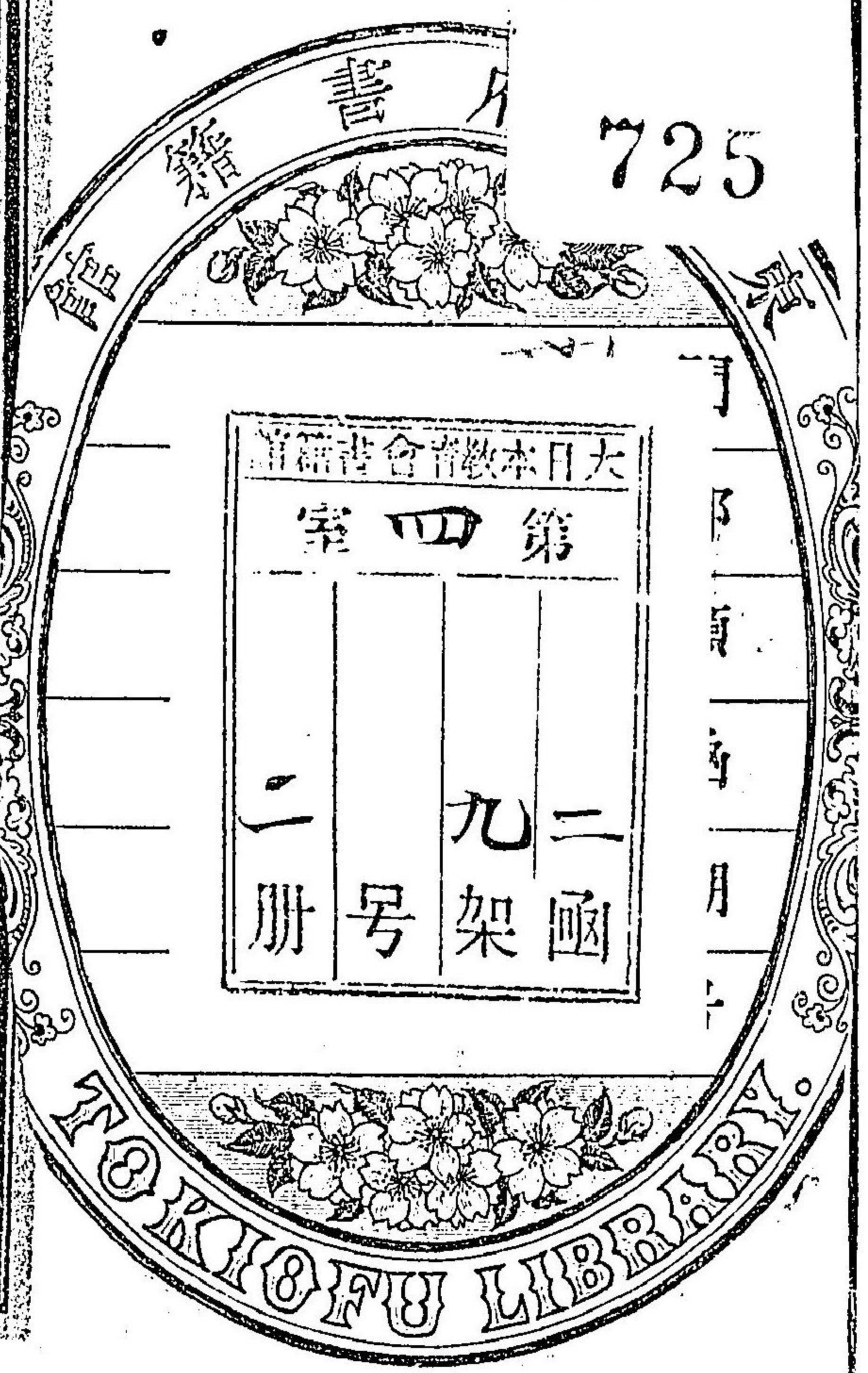
算法玉手箱

福田理軒編輯

下

特 59

725



丁
月
年
月
日

和洋普通算法玉手箱下之卷一名智計開化

福田理軒編

上之卷の答式

(一) 義經の曰く先は男子二人有る處へ老婆二人の男子
と連子一再嫁せし者ありべし

男男男男男女男男

(二) 揚脩の説は曰黄絹ハ色の糸あり色の糸ハ絶の字あり
幼婦ハ少女あり少女ハ妙の字あり外孫ハ女子あり
女子ハ好の字あり壺ハ辛きと受る器あり受辛

ハ辭の字あり因て此文で賞して絶妙好辭と題せし
ありと云はるは曹操朕が按も亦同くと云へり
主人の親あり

學生の曰く太陽は横面あり

前年在り

(三) 三十一個の内一個を残して二分の一出錢せし者へ渡せし又三十一個の内一個を残して三分の一出錢せし者の取分あり

(四) $\frac{31-1}{3} = 10$

(五) $\frac{31-1}{2} = 15$

(六) $\frac{31-1}{5} = 6$

此の如く分ちあり

(七) 十七匹を一匹を加へ二分一匹を二分の一出金せし者へ渡せし又十八匹を三分一匹を三分の一出金せし者へ渡せし又十八匹を九分一匹を九分の一出金せし者の取分と残り一匹を曳き歸りあり

$\frac{17+1}{2} = 9$

$\frac{17+1}{3} = 6$

$\frac{17+1}{9} = 2$

此の如く分ち一匹残りあり

(八) 三國志は曹操韓遂は與ふ書は多く點竄ありとあり
點ハ減去と云竄ハ添入と云今の點竄法ハ關孝和先

生の發明より初め飯源整法と云後ち松永良弼に至り其主君岩城侯の命を以て名を點竄法と改む

(九)

鶴林玉露より曰く漢の王章文士を喜びを嘗て人より語て曰く此輩より一把の算子と與ふとも其顛倒を知る何と國は益ありん哉とあり即ち今の算籌あり又通鑑より之を握算と改むれど算子の文字穩當あり哉

(十)

象を船に乗せ其船の水痕を視て其輕重を知り魏の倉舒より云凡そ物と水と容るる水より輕き物に浮き重き物に沈むべし今を距り數百年前よりアルシメ

グと云人の究理家より其頃の國王は黄金の冠をかりて其真偽を試ると四方を募り探索せしアルシメデス氏或時浴湯の中は在て此學の本源を發明し悦ひに堪え躍り出て其身を拭ふ暇まのりて街頭を走り大聲を放ち予いま之を發明せりと唱言せりと云夫より其冠と同重あり黄金を以て之を水に沈め其減量を稱りしと十九分の一を得て之を記し置き黄金の水に比しは其重十九倍ありとを定め更は其冠を取て又水に浸せしと純金あり則ち其減數同等ありべきと等しくしとを以て他物の混交

とらとを知り又同量の銀を取り水に沈め其減量と計るは二十一分の二ありとを知り之と比較して其冠の半金半銀ありとを發知せりと云是則ち稱水術の根源あり

(二)

圓法の空按トよめハ左の如く一一三三五五と併へ書し其中央

$$\begin{array}{r} 113 \overline{) 355} \\ 113 \\ \hline 242 \\ 113 \\ \hline 129 \\ 113 \\ \hline 16 \end{array}$$
此の如く覺ゆ則ち百十三より之を分
と三百五十五の比と速々よ
うべし
知るべし

(三)

其時徵士算顆盤を乞ふ青砥氏役官は命し算顆盤を授く徵士敬しく算顆盤を取て一貫文と置き高聲を

二一添作の五と唱へ五と一五百文よて候と答しハ青砥氏速々は徵士を擧と云これ則ち機慧を悟せとハ反對と雖も今の學生計算と粗厲よして心計と誤る者多し試數を精々きるは因をあり此徵士の擧らる哉所置の粗漏ありきるは在り

(三)

或人市店に行て壺を買んと欲し其價を問ふは大の壺ハ十錢よして小の壺ハ五錢ありと答ふ然らハ小の壺を求むへとして銀五錢を渡し小の壺を持歸りし暫く在て其人小の壺を持来りて曰く少くして其用を為さば仍て先刺五錢を渡し置り今此壺を

渡し大の壺と換やへりて大の壺を持歸りて云
此商人算法は暗きよりして損矢くくを壺算用と
云いとや

(五) 此章の上卷二十三條算顆盤の語の如くして念佛を
唱へ百八の珠數を繰ると凡そ一呼吸の間と十遍
繰得るとして一晝夜の息數五万の間とよハ五十
万遍ありべし故に繰る半日或ハ一日の勸經にて百
万遍と云ハ虚言あり此の如く稱名念佛を唱へる
則ハ百万遍脩くく功德を得る意ありべし

(六) 此題ハ一は揃やると則ハ九を乗し三は揃やると則ハ九
二十七を乗し四は揃やると則ハ九三十六を乗し何れ
も揃へんと欲する數は九を乗しくく數を乗せば
此題ハ一二三四五六七八九と置き末位の九斗りよ
九を乗し八より上へハ八を乗し九八七六五四三二
一を得る

(七) 此題ハ一二三四五六七八と置き尾位の八斗りよ八
を乗し七より上へハ七十一を乗し七十一ハ尾位の
一を減し八七六五四三二一を得る

(八) 此題ハ一二三四五六七と置き尾位の七斗りよ七と
乗し六より上へハ六十二を乗し六十二ハ尾位の七
は九を乗し内一と

減りたるあり七六五四三二一と得る
余ハ之ニ做へり

(五) 此題ハ九の連続数より尾位の内一と減り尾位
の次より其位数を退き一と加へて得る假令九九九
九の四位の如きハ九九九八〇〇〇一と得る九九九
九九九九の七位の如きハ九九九九九八〇〇〇〇
〇〇一と得るあり

(三) 此題ハ八十一と分母と一と分子として得るあり
此題ハ八十一と分母と一と分子として其數を
得る

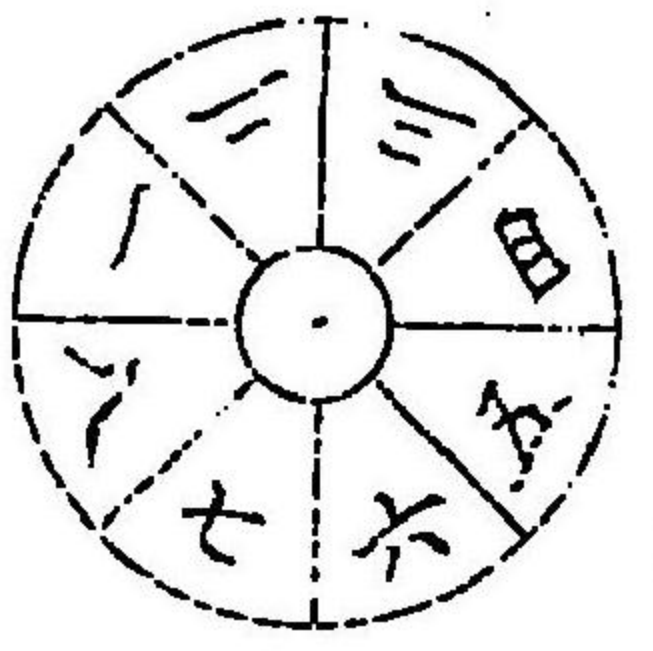
(四)

此題ハ難問あり故ニ別ニ工夫を施さべし因て先づ

平生の如く十三と以て除くハ八五四六九迄除く則
ハ残り一三十三と得て之ニ九と立ると則ハ除くと
得て因て八五四の次ニ七と立て次位の一と其次の
十と以て次位の一と為ると則ハ二十あり又二位下
十と一位上ると則ハ一とあり因て此二十一と三七の
二十一減り残る〇〇〇十とありて除くと
得べし

(五)

此傳ハ裏の輪にて下圖の如く左
の上の處を一と定め夫より次第
ニ二三四五六七八と定るときハ



裏の
第一
の輪

よてハ一ハ見吉野二ハ枯木三ハヨウリ四ハ十五夜
あり又第二の輪よてハ一ハ花橘二ハ丹霞三ハ千鳥
四ハ志ヤコトクンあり遂て此の如く定るときハ第三
の輪よてハ一ハ法隆寺よて五ハ東雲八ハ紅あり
第八の輪よ至るまで皆此の如く定め置き而して
其目附の知よハ客人よ表の圖ハ何れの輪よを望
ミの香ありヤと尋ぬへハ客人ねさめの香と望むと
きハ第三の輪よ在と云へハ此第三と覺へ置き又裏
の圖よて何れの輪よ在ヤと問へハ客人必キ第五の
輪よ在と云べハ然るときハ裏の第五の輪よて一よ

り始め三よ當る處を視て客人の望ミハねさめあり
と答るあり 此三ハ覺へ置き 若ハ又客人の玉椿と
望ミて表の輪よ第六よ在と云ハ此第六と覺へ置き
裏の圖よて何れの輪よ在ヤと再び問へハ客人必キ
第三の輪よ在と云べハ然らハ裏の第三の輪よて一
の法隆寺より繰て第六よ當る處を視て玉椿ありへ
ハと答ふあり

(六)

此傳ハ何れの枝よても葉よ在る文字ハ算よ加へて
間捨よハ花よ在る文字を算するあり第一の枝の花
と一とハ第二の枝の花と二とハ第三の枝の花と四

と一第四の枝の花と八と一第五の枝の花と十一と
 定め置き前題の如く第一枝の花は在と云ハ之で一
 と覺へ第二枝の葉は在と云ハ捨置き三の枝の花は
 在と云ハ此枝の定法四と始めの一は加へ五と覺へ
 置き四の枝の葉は在と云故は捨置き五の枝の花は
 在と云因て此枝の定法十一と前は覺へ置一五は加
 へ十六とあり之でa b cより計へ十六字目ハPは
 當りあり又后の問の如く一の枝は葉は在と云之
 ハ捨置き二の枝は花は在と云故は此枝の定法二
 と覺へ置き三の枝は亦花は在と云故は此枝の定

法四は前は覺へ置一五は加へ十六とあり覺へ置き
 四の枝は亦花は在と云因て此枝の定法八と前は
 覺へ置一六は加へ十四とあり五の枝の葉は在と云
 故は捨置き此十四とa b cより計へ十四ハ九の字
 は當り故は其通りは答ふるあり

洋字

一	A	二	B	三	C	四	D	五	E	六	F	七	G	八	H	九	I	十	J	十一	K	十二	L	十三	M	十四	N
十五	O	十六	P	十七	Q	十八	R	十九	S	二十	T	二十一	U	二十二	V	二十三	W	二十四	X	二十五	二十六	Y	二十七	二十八	二十九	Z	

此法ハ櫻木目附字と云て大和歌を記し之を算し
其文字を知る技多れといま兒女の洋字を學ぶ者
の一助ともあらんかと右の如く更わしかり

(三)
此傳ハ何れの數までと三數とも乘て出しし數の
尾數と一目は視て速く其乘しし數と云法より
て其乘しし數の尾位を胸中にて十の内減をれハ
即ち乘しし數と知るあり故に其乘しし數と五
七と云へハ此尾位の七と十の内減し乘しし數と
三と一又六三二と云へハ此尾位の二と十の内減し
乘しし數と八とに又三五六三と云へハ此尾位の

三と十の内減し乘しし數と七と知るべし

説明 19 319 等は限らば何數まで問題の數の尾
位より用ひハ何數まで右の法を用ひへし

(六)
此傳ハ其乘しし數を見て胸中にて傳法の七と乘
しれハ末は其乘しし數と知るあり其乘しし數
の首らと消し残り四二九一とありしを視て此數
は胸中にて七と乘しれハ三〇〇三七とあり此上の
三〇〇と棄て末の三七と乘しし數と知るあり又
〇〇〇八一と云時ハ胸中にて七と乘しれハ〇〇〇
五六七とあり〇〇〇と棄て末の五六七と乘しし數

數と為せあり若し胸中にて乘し難き人ハ他人の知
らぬよふに密に乘して可あり

説明 此問題の數八五七一四三の傳法七の原因
ハ六〇〇〇〇〇一を置き七よて除きうる數あり
因て上位と棄るとも原除する七と乘せられハ〇位
と帶より一は歸するやハ其乘しうる數で下位
は顯ハとあり他數の問題を設けんと欲せハ皆ハ
此例は準ふて求むへし左に其一二を擧ぐ

問題數 一五七一四三 傳法七
五八八二三五三 傳法十七

閏年を知る算

日本紀年明治十二年ハ二千と置き内定數六百六十
年と減し餘り距離より之を四と以て除き奇零あり
則ハ平年より奇零あり除き盡る則ハ閏年あり又距
算は百以下の數なき則ハ四百と以て除き奇零あり
則ハ平年より奇零あり除き盡る則ハ閏年あり若し
又距離は千以下の數なき則ハ四千と以て除き奇零
あり則ハ閏年より奇零あり除き盡る則ハ平年
と其理ハ花井氏著を処の太陽曆俗解に詳あり
二千五百三十九年 明治十二年 平年

同	四千〇年	同	十三年	閏年
同	四十四年	同	十七年	閏年
同	四十八年	同	二十一年	閏年
同	五十二年	同	二十五年	閏年
同	五十六年	同	二十九年	閏年
同	六十年	同	三十三年	閏年
同	六十四年	同	三十七年	閏年
同	六十八年	同	四十一年	閏年

例年一月の定法を知る算例月の値曜を
 求める算の用

紀元二千五百三十一年明治四年の一月〇日と元と一平

年の定法を二とし閏年の定法を三とし其年迄を積算し七は滿れハ之で去り餘りを其一月の定法とて前より記を閏年表の外より二千五百三十二年明治五年と二千五百三十六年明治九年と閏年とを平年一 閏年二 加法假令明治十二年二千九百一十九年一月の定法を求めよハ明治四年より十二年迄ハ明治五年と九年ハ閏年より閏年と二と為るやハ五年九年まで四とし又四年六年七年八年十年十一年と此六年ハ平年あり平年と一と為るやハ六年まで六あり此六は閏年の四を加へ十とあり七は滿るを去り餘り三とありこれ明

治十二年一月の定法あり又十三年一月の定法ハ之
ハ十二年平年の一と加へ四とあり。十三年一月の定
法あり又十四年一月の定法ハ之ハ十三年閏年の二
と加へ六とあり。即ち十四年一月の定法とて又明治
十五年よりハ十五年一月の定法とて。とて既往を算
せ之より後の平年閏年を算し其一月の定法を知
るへし

例年例月の定法を知る算

大月	一月三月五月七月八月十月十二月	各加法 三とあり
小月	四月六月九月十一月	各加法 二とあり

二月

平年ハ加法一
閏年ハ加法二

假令明治十二年例月の定法を求るより先又求めと
る一月の定法三ハ其月大の月ありの三と加へ六とあり
二月の定法とて又此年ハ平年あり。即ち二月ハ。よ
して加へて直ち又六と三月の定法とて又其月の
三と加へ九とあり。七と満ると去り二とあり。四月の
定法とて又其月の二と加へ四とあり。五月の定法と
て又其月の三と加へ七とあり。七と満ると去り〇と
あり。故に六月ハ定法〇とて其月の二と以て七月の
定法とて又其月の三と加へ五とあり。八月の定法と

一又其月の三を加へ八とあり七は満るを去り一と
 あり九月の定法と一又其月の二を加へ三とあり十
 月の定法と一又其月の三を加へ六とあり十一月の
 定法と一又其月の二を加へ八とあり七は満るを去
 り一とあり十二月の定法と一
 又明治十三年例月の定法を求るよハ其一月の定法
 四を置き月々の大小の加法を加へ前法の如く得る左の如く
 一月四 二月〇 三月一 四月四 五月六 六月二
 七月四 八月〇 九月三 十月五 十一月一 十二月三
 例年此の如く其月々の定法を求め暗唱し置く則

(元)

ハ年中の値曜胸中にて自在に知るべし
 明治十二年三月九日の値曜を求るよハ前條を求め
 ると十二年三月の定法六は此九日を加へ十五とあ
 る七は満るを去り一とあり故に日曜と知る
 明治十三年五月七日の値曜を求るよハ前條を求め
 ると十三年五月の定法六は七日を加へべきあり七
 七は満るを去り一とあり直ち六を以て日月火水木金
 と計へ金は當るなりは金曜日と知る七日十四日二十
日等ハ何れも加るよ及むを直ち定法の數を算むべし
 緑法 一日曜 二月曜 三火曜 四水曜 五木曜 六金曜

七上曜

(三)

傳は曰く一ツと二ツの法ハ其聲Rは止る故は其數十八でハ十八は當り置きニツを乘し三十六とあり内原數三十を減し餘り六とあり即ち一ツの方六層あり又原數三十の内十八聲を減し餘り十二とあり即ちニツの方十二層あり
又一ツと三ツの法ハ其聲Pは止る故は其數十六は三ツを乘し四十八とあり内原數三十を減し餘り十八とありニツは除き九とあり即ち一ツの方九層あり又原數三十の内聲數十六を減し餘り十四とあり二

(三)

ツは除き七とあり即ち三ツの方七層あり
又ニツと三ツの法ハ其聲Kは止る因て十一は三ツを乘し三十三とあり内原數三十を減し餘り三とあり即ちニツの方三層あり聲數十一はニツを乘し二十二とあり原數三十の内減し餘り八とあり即ち三ツの方八層と知るべし
傳は曰く正方は併へる法ハ其崩せし残り三は四角の四を乘し十二とあり之は定法十二を加へ二十四と答ふべし若し亦残りありと云ふ時ハ總數八ツとも答ふべし

算法

七上曜

七

正三角は併へる。法ハ其崩せし残り五ツは三角の
三を乗し十五とあり。之は定法六を加へ二十一と答
ふべし。若し亦残りありと云ふ時ハ六ツありべし。又
残り一ツと云ふ時ハ三ツありべしと答ふ。

正五角は併へる。法ハ其崩せし残り一ツは五角の
五を乗し定法二十を加へ二十五と答ふ。若し亦残り
ありと云ふ時ハ二十ありべし。又残り一ツハ五ツと
も十ヲとも答ふべし。又残り三ツハ十五とも云べし。
凡そ何角は併ありとも其定法を求るまハ其角数の
内一を減し餘り角数を乗し定法とを何れも此定法

より少き数を併へ崩しる。残りをもその時ハ答數不
定にして數件あり。故に定法の數より多き總數を用
やると要をべし。

(三)

傳は曰く何徑何廻よても始の數一を中央は定め次
の二を其下は置き終りの數一より九迄の數ハ九を
終りとしを中央の上は置き夫より徑數ニ徑ありハ
ハ三を減しる。數を上の方へ次第は置き又下の方
へハ次第は徑數を加へる。數を併ふ時ハ外廻迄
の上下の數を得る餘ハ考へ得べし。

(三)

此法ハ一圖の如く各其數字を順列し二三の圖を製をべし。

一圖

行	行	行	一級
7	4	1	二級
8	5	2	三級
9	6	3	

行	行	行	行	一級
13	9	5	1	二級
14	10	6	2	三級
15	11	7	3	四級
16	12	8	4	

行	行	行	行	行	一級
21	16	11	6	1	二級
22	17	12	7	2	三級
23	18	13	8	3	四級
24	19	14	9	4	五級
25	20	15	10	5	

二圖

三	一	二
一	二	三
二	三	一

一	四	四	一
二	三	三	二
三	二	二	三
四	一	一	四

四	五	一	二	三
五	一	二	三	四
一	二	三	四	五
二	三	四	五	一
三	四	五	一	二

三圖

三	一	二
一	二	三
二	三	一

一	四	四	一
二	三	三	二
三	二	二	三
四	一	一	四

四	五	一	二	三
五	一	二	三	四
一	二	三	四	五
二	三	四	五	一
三	四	五	一	二

二圖の如く順次を製し之を交錯して三圖を製し假令ハ三圖の符号ラを二行の三級としラを三行の一級とし逐て此の如く見做し行級の遇ふ処へ一圖の順列數を交換し各を得る三の方陣よてハ二行の三級ハ順列圖よてハ6あり四の方陣よてハ一行の一

ると雖も通術を見ま又坂正永氏の二精評詮と云
 書は真數と載れども其術を傳へを茲載る処ハ小
 出脩喜先生文政年間ハ發明せられし法あり
 通術ハ曰く法數の内一個を減く餘り之を自約し其
 自約數を互乘し數件の汎位數で得て之を標とし又
 法數を以て一個を除き最少の汎位數より其不盡其
 不盡を自乘し法數ハ滿るを去り前位二倍數の不盡
 とし逐て此の如く汎位數を試し一周の位數を得
 次之を詳解と
 假令ハ法數三百五十三を以て一算で除き幾位より

て不盡より一算で得るや

答 三十二位よりして不盡一あり

解ハ曰く法數三百五十三の内一個を減く三百五
 十二とあり之を自約し其法明治塵劫記 三、二、二、二、
 二十一と得る之を互乘し二 四 相乘 八 二、二、二、
 十六 二、二、二、 三十二 二、二、二、 十一 二十二
 二、十一、 四十四 四、十一、 八十八 八、十一、 百七十
 相乘 六、十六、十 此十件で各汎位數より之を標とし而
 して法數三百五十三を以て一算で除き 二八一

一六 此の如く商の首より不盡の尾位に至り五位
 の内一位を減し位數とを故に四位の不盡也

四位の不盡一一六と一實は除くもの此一一六で
 自乗一三四五六とあり法數三五三二満ると去
 り残り四二で四位の二倍數八位の不盡四二とと
 未の汎位は又此四二で自乗一七六四とあり法
 數三五三二満ると去り残り三五二で八位の二倍
 數十六位の不盡三五二とと雖も此汎位は合はると
 の差一個あり凡そ法數不盡の差一個あり此不盡
 則に恒は其次の汎位は不盡一と得るあり
 三五二で自乗一三九〇四とあり法數三五三
 二満ると去り一と得る即ち十六位の二倍數三十
 二位の不盡一とと又汎位の三十二位は合は

假令の法數百二十七で以て一算で除き幾位よりて
 不盡は一算で得るや

答 四十二位よりて不盡一と得る

解と曰く法數百二十七の内一個を減り之と自約
 一三三七で得る之と互乗一六九十八
 二十一十四四十二六十三と得る之と汎位
 と又法數を以て一算で除き七八七四〇一五〇
 九五之と九位の不盡九五と一之で自乗九位法數は
 満ると去り八と得て九位の二倍數十八位の不盡
 と一再び法數を以て三位除き二十一位の不盡一

二六しあり之を自乗し法數は滿るを去り不盡一
 を得る即ち二十一位の二倍數四十二位の不盡一
 を得るあり

例題

法數十七
 法數十九
 法數百六十七
 法數千四百〇九
 法數八万〇八百三十一
 各此題を攷究せよ

十六位は得る
 不盡一位は得る
 十八位は得る
 不盡一位は得る
 百六十六位は得る
 不盡一位は得る
 三十二位は得る
 不盡一位は得る
 四万〇四百十五位は得る

因に説く洋式は循環小數を求る捷法あり菊地
 大麓氏は間處を左に録と

循環數を得る捷法

凡て循環數は其分母の單位一あり則ち循環數の尾
 位必ち九あり分母の單位九あり則ち循環數の尾位
 必ち一あり分母の單位三或ち七あり則ち循環數の
 尾位も亦必ち三或ち七ありべし之を定則とす故に
 十三分の循環數の尾位は三よして十九分の循環數
 の尾位は一あり

假令七十九分の一の循環數を求るが如きは分母の

	6481
32	
38	
64	
67	
56	
62	
16	
22	
16	
18	
64	
65	
40	
46	
48	
52	
16	
126582278481	

單位九あり、ゆへ循環數の尾位を一一分母の七十
 九で乘し一を加へ八十とあり、之を十分し八とあり、
 因法とし循環數の尾位一を記し因法八を乘し八と
 あり、尾位の次とし此八を又因法八で乘し六十四と
 あり、此四を其次位とし此四を因法八で乘し三十二

とあり、此二より前の六ありを加へ八とあり、之を其次
 とを逐て此の如く右式の如く循環數一二六五八
 二二七八四八一を得るあり

假令十七分の一あり、循環數を求るよ、分母の單位
 七あり、ゆへ循環數の尾位を七とし之を分母で乘し
 百十九とあり、一を加へ百二十とあり、之を十分し
 十二を得る、因法とし循環數の尾位七を記し之を因
 法十二で乘し八十四とあり、此四を尾位の次とし逐
 て此の如く前法を因て左式の如く布算し循環數五
 八八二三五二九四一一七六四七を得る

847
<u>48</u>
56
<u>72</u>
77
<u>84</u>
91
<u>12</u>
21
<u>12</u>
14
<u>48</u>
49
<u>108</u>
112
<u>24</u>
35
<u>60</u>
63
<u>36</u>
42
<u>24</u>
28
<u>96</u>
98
<u>96</u>
10588235294117647

又十七分の五の循環数を求るゝ如きは先づ十七を以て五を除き二九四と余り二とあり然る則ち此二九四ハ前循環数の七位目より起り故に其下ハ前数より同じて知るべし

本朝暦法の小傳

暦ハ歴あり歴々而して以て觀るべく以て法るべき哉蓋し神武天皇元年辛酉の歲始て十二月で推出と最む廿四氣あり一周の代ニ至ニ分有て廿四氣あり漢ニ至り始て廿四氣あり如し仁徳帝十一年舒明帝七年兩次ニ暦法を革むと云と雖も其法を詳しよせと欽明帝十五年百濟國より勅を奉り暦博士固徳王保孫で貢る推古帝十年百濟國の僧觀勒來りて暦書及び天文地理の書并ニ遁甲方術の書を獻て同く十二年正月戊申朔を以て始て暦日を用ひし云持統帝四年勅して始て宗の元嘉暦を用ひ開朝

以来今年に至り用やうの曆書遂に傳らんと云
是より曩き堯帝の時日月を曆象し四時を定め舜
帝璿璣玉衡を造り以て七政を齊ふに演り西漢の
武帝大初元年劉歆三統曆を造り始て積年日法で
立て以て推歩の準とを東漢の獻帝建安十一年劉
洪乾象曆を造り月行は遲疾ありとを示し其後ち
晋の姜岌三紀甲子曆を造り月食の衡を以て日躔
を檢知し又宗の文帝元嘉廿年何承天元嘉曆を造
り朔弦望を以て大小餘を定む又孝武の大明六年
祖冲之大明曆を作り大陽は歳差を生じ極星の正

極は在るると云又隋の文帝仁壽四年劉卓皇極
曆を造り日行の盈縮を明くと其後ち唐の高祖
武徳元年傅仁均戊寅元曆を造り又高宗の麟徳元
年李淳風麟徳曆を造り晦晨は月の見やりに避く
玄宗の開元十五年僧一行は詔して大衍曆を造ら
しむ又代宗の時郭獻之等は詔して五紀曆を造ら
しむ穆宗の長慶二年徐昂宣明曆を造り始て日食
は氣刺時の三差ありとを悟り又趙宗の徽宗崇寧
五年姚舜輔紀元曆を造り寧宗の慶元五年楊志輔
統天曆を造り始て歳實は消長ありとを云又元の

郭守敬自ら表を立て影を測り天の順ふて合さる
とて求め至元十八年辛巳を以て推歩の起算とし
授時暦を造る古暦より比しれ、其法自然を得たり
又明の洪武年間より元統大統暦を造る是より後ち
萬曆崇禎の間より至り數理の術漸く密よりて西
洋の學士十餘人各英邁の才を以て遠く支那より入
て渾天合地の説を唱へ中ん就く羅雅谷、湯若望の
徒多祿、某歌白尼、第谷等の遺法より原因より崇禎曆書
百二十卷を著し其推驗の詳密ありと支那開闢より
此の如きハあり又清に至りて聖祖皇帝天縱多能

よりて心て律曆算法より留め數十年の繁蹟を博考
し公卿大夫と共に數理精蘊律曆淵源曆象考成數
百卷の書を著し奥微を盡せり當今の時憲曆あり
ものハ曆象考成後編より因りあり其後ちの曆象で
説者皆ふ崇禎考成の二書より原因せきりハあり
持統帝六年又儀鳳曆此曆史傳より見へし又唐志より九
疑らるハ唐の高宗儀鳳年中より此曆名あり
唐より傳來しハ処の曆ありんとして用ひ頒ち行ふと七
十二年よりて孝謙帝天平寶字七年大衍曆を用の頒
行しと九十二年よりて文德帝齊衡三年より至り五
紀曆を以て大衍曆と兼用し清和帝貞觀元年勃海大

使馬孝慎新^ゆの宣明曆を貢る同く三年前曆を用ひ
 と九十八年よりて之で停り宣明曆を頒行と最も後
 に至り賀茂保憲天文曆數を掌り以て世に鳴る曆道
 と以て其子光榮^{加茂家あり後}幸徳井と稱と傳へ天文道と以て
 高弟安倍朝臣晴明^{家あり}傳ふ家ありと云
 以後曆道は賀茂家の代々作業ありり天文年間
 其子孫備中の國に沈落と故に詔して土御門有備
 卿に天文曆術二道と兼り其後南都の社人に加
 茂家の廢流ゆりて知り土御門家より執奏して
 曆博士と為り曆科を與ふ曆科は足利家執政以來

後醍醐帝
あり

諸職衰絶し曆官微賤よりて僅に山城の國田中の
 里^{吉田村のよて五十石を存と其後幸徳井之で領}
 せり又其後陰陽頭は加安兩家の外之に任せと云
 嵯峨帝寛元四年正月朔日食に當り諸道勸申し
 申酉の間よりて蝕し正しく視へると獨り算道三善主
 税頭雅衡の食をへらると云果して其言の如し之
 を賞し正四位下を叙しこれ雅衡の數理を明らよ
 里差を辨せられあり而して宣明曆を頒用せらる
 百二十三年よりて靈元帝貞享元年元の授時曆を用
 んと欲せられり昔時胡元の我國を寇せり故を以

て専用とす。とて欲せし明の大統暦を以て之を損益
陰陽頭安倍泰福卿及び暦官保井春海算哲と稱す
の官士後濫川と改姓と河と新暦を造り之を奉る名
内國洪川郡と出れりありと新暦を造り之を奉る名
貞享暦と賜ふ同く二年新暦を頒行と

其後江府に於て火星の心宿を躔るを視るは清の
時憲暦の火星室宿に在て天と差ふと甚しきを以
て書で清朝に送り之を論訂せんとして欲せり
林家肯んせと云按り、此時時憲暦の曆象考
成に因り雖も未だ後編を用ひざる時、在て五星
の推歩粗ありとありん哉

享保十七年五月中根丈右衛門元珪京都銀局の士に命じ伊
豆下田に於て太陽の高卑を測量せしむ又貞享暦を
頒行せり、と六十九年よして桃園帝寶暦四年陰陽頭安
倍泰邦卿及び暦官洪川圖書光洪等新暦を奉る名で
寶暦甲戌元暦と賜ふ其後京師の人中根丈右衛門元
珪私に西洋の圓々暦を備へ寛政年間に至り甲戌元
暦の天と差ふと多く正月元旦は日蝕せり、暦面
これに載さるるに至れり其頃豊後杵築の藩醫綾部安
彰と云人星象の學を好み官を辞し浪華に遊ひ姓を
更へ麻田剛立と稱し最ら星暦の學を攷究し寒暑

論せも仰天露座一星象を測量一自ら象鏡を磨り
 種々の窺天鏡で造り反寫鏡今時曲折で創製一實測
 試験で専務と一曆理法で脩一消長法で發明一日月
 蝕で推算も精密ありと古今に超越せり既官曆の
 天に合せざるを曉も又清高船載るゝ処の崇禎曆
 書と其術理全く合符と云其言幕府に聞へ之を徵
 も剛立辞きゝは病で以て一且つ二君に仕へざるを
 示も又私に云官を求め何を此道で脩るゝとて終ん
 哉と依て其門人高橋作左衛門至時大坂京橋口で徵
 一亦市井の人間五郎兵衛重富大坂長堀富田屋橋よ
て質物の商家十一屋

云之の副幕府司天臺に於て曆象考成を襲用一崇
 禎曆書を折衷一消長法で加減一新曆を造り之を奉
 る名を寛政曆と賜ふ甲戌元曆を頒行するゝと四十四
 年よして寛政十年更に寛政曆を頒ち行ふ高橋至時
 の幕府の司天官吏と為り間重富の地を賜りて其地
元東町奉行屋浪華と歸る其後高橋至時同門足立左
鋪の北より内信頭大坂五十軒屋で推し之で擧げ其官の属史と
 せ寛政十二年官命して伊能勘解由忠敬常州人にて
 日本國內の測量を脩せしむ文化十年に至り東西沿
 海の測量卒業せしと云又天保年間に至り阿州の天文

生小出長十郎脩喜と云人田称宮曆算を研究し私曆
を編集し又臘蘭埜曆書を譯述し實測して官曆の大
に合せきりて證し屢々幕府に就て洋曆を以て革
曆せんとして請ふと雖も許されず而して後天保十三
年官臘蘭埜伯シイボの兩曆を脩し新曆を造り之で奉
名て天保壬寅元曆と賜ふ寛政曆を頒行せしむ四
十四年よりて又新曆を頒行す其後維新の革命に遇
ひ明治三年更に星學局を東京に置く同く五年星學
局を編集局に合し又圖書局に更称す壬寅元曆を頒
行するに三十二年よりて舊曆の推歩を廢し英の航

海曆を譯し時差を補ひ大陰曆を編み明治六年より
太陽曆に合し兩曆を頒行す今哉諸官省に在て各其
局を設け星象地理の測量を備し一日又一日と化新
に暨る漸次は推曆の法も亦全備し偉功を奏するに
期し而して知るべし

本朝算學の小傳

數の宇宙に在て術の人は在り本朝算學の興廢古昔
に知る者孝德帝大化二年詔して聰敏よりて書算に巧
みあり者を取て主政主帳にせよとあり文武帝大寶
元年選定せられて算博士の職あり清和帝貞觀四年

勘解由次官從五位下兼行算博士家原宿禰氏主で美作権介よ任を寛平延喜の間よ在て參議三善清行で算道の祖と云其後受官して此道で能く人々三善小槻の二家と云保元の頃日向守通憲計子算を傳ふと云又鎌倉の時源性と云人のて算で能くと雖も其法を傳へて中古戦國捨擲の日よ及ひ算數の學地よ墜て世教よ關るよとて知も士ハ軍務よ勞り民ハ流離よ若し除算で煩るよとして用ひも乘算のて用ひ之で正慶算と云亀井算の類は輒近慶長元録の間草抹の始れ毛利勘兵衛重能豊臣家と云人此道

を好み明朝は航し受學するよは遇ひ從五位下出羽守よ任を歸朝の日大坂落城よ及ひ浪人して江戸よ居る弟子よ教授を其術開平法よ及ハされよ後世算學の律梁より此時四海昇平で樂み藝よ遊ふ人少からるよ今村仁兵衛知商吉田七兵衛光由山城人高原庄左衛門吉種后一元と稱すの三氏其門よ在て相並て明の程大位の算法統宗で得て九章の術で詳解し弟子は授く今村知商の門で平賀勘右衛門保秀始め堀田上野介の家よ仕ふ后水戸黄門光國卿の名よ應し水戸侯よ仕へ五百石と領し郡奉行と勤む致仕して舟翁と号す天和三年八月三日安藤有益隅田江雲と云吉田光由の門で横川

玄悦と云算學啟蒙より算盤級聚の術を發明も高
 原吉種の門を磯村喜兵衛吉徳丹羽左京大夫の家は仕ふ内藤治
 兵衛石川美作守の家は仕ふと云村松九大夫茂清浅野内匠頭の家の仕ふ赤穂の義士村松秀直の祖父の養父の門より出て村瀬
 所左衛門義益下総葛飾郡の驛の人磯村吉徳の門より出て星
 野助右衛門實宜の横川玄悦の門より出て佐藤利左衛
 門正奥池田昌意始の古郡彦左エ門と云野田小堀
 市郎右衛門の隅田江雲の門より出て其他榎並和江山
 田正重野澤定長等皆を今村吉田高原の門より派出
 各一著述あり池田昌意の門より保井算術春海幕府基所の士

后日官の祖と中西十大夫正好初の床井丈左衛門は
 澁川家の祖と中西十大夫正好初の床井丈左衛門は
 后江戸稲町に在り中西正好の關氏の門中より天
 元術を得て自立して生徒を教諭とて中西流の祖
 とて其弟で中西文左衛門正利と云門人と河内武太
 夫松平美濃守の家は仕ふ久留島左助川崎新兵衛藤野源四郎幕府の士御賄入江十大夫の家は仕ふと云河内武大夫の
 門より磯村十郎右衛門あり中西正利の門より井上嘉林
 の村松茂清の門より湯淺市郎左衛門得之あり又星
 野實宜の明の朱世傑が算學啟蒙を得て天元術を發
 揮せり延寶の頃關新助孝和先生字子豹本姓内山關氏の家で嗣幕府の

士始め高原吉種と師とを遂に数理の妙を究り一度
 算題を視て千變万化神悟妙解自由ありきふ一時
 人称して自由亭先生と云寶永五年七月出で傑出の才
 月廿四日歿と江戸牛込浄林寺に葬る出で傑出の才
 て以て諸氏の書で涉獵し自ら一機軸と出で發明を
 る處最も多く天元演段諸約翦管招差角術圓法弧背
 等に至り前代を超越し算學大ニ備けり實に命世
 の才と云へし之で關流の鼻祖と此門より出る徒ら
 拔擧せしむる雖も所謂荒木彦四郎村英始り高
 陽の學武後藤角兵衛開備前守建部兵庫賢之と云賢雄
 府の士享保八年八月建部興兵衛賢明初め隼之助と
 十七日歿と年七十建部興兵衛賢明初め隼之助と
 保六年七月建部彦次郎賢弘不休と子と賢明の弟と
 十日歿と

四年七月二十日歿と年七十三瀧四郎衛門郡智三埃
 六江戸小日向龍向寺に葬る三瀧四郎衛門郡智三埃
 八左衛門久長澤口三郎左衛門一之の京都宮地新五郎
 可薦戸市谷と住と青山利永江戸市谷と住と后等か
 り澤口一之の門は佐藤茂春の撰人なり建部賢弘の門
 小池七左衛門友賢水府の士字伯純挑洞と号と初
 彰考館の總裁と君命を授け江戸に來り建部賢弘
 及ひ波川春海と從事し其學を究め始り關流と水府
 二月二日歿と年七十二年閏池部良齊清直京都の時江戸に
 在て某侯に仕へ公務の餘力心で中根丈右衛門元珪
 算學を留め遂に關氏の傳を得る中根丈右衛門元珪
 名璋近江淺井郡の人京都に出で長し江戸に居ると因
 て白山と号と幼と算數の妙旨を究り強勵人過き著
 り建部氏に就て算數の妙旨を究り強勵人過き著
 書最も多く銀局の士に擧られ享保十八年九月歿と

十年七あり之て中根流の祖とて荒木村英ハ關氏の高
 弟よりて圓理草稿で師より受け之て校訂して圓理密
 術乾坤二卷の書とあり之て宗統の傳書とて荒木氏
 で以て關流の直傳とて其門は太高庄大夫由昌江戸人
 宮井信敷江戸大久保佐野重好江戸市谷石津直行江戸人
 松永安右衛門良弼東國或龍池或探玄或葆真齊と号
 の産よりて内藤備あり松永氏で關流の二傳と云關
 後守の家より仕ふ
 氏の雜記等村英校讎は違ありもの良弼盡く校
 讎し略己の意で加へ關氏の書遂に全きを得ると云
 其門は内藤備後守政樹從五位下陸奥岩城平山路主

住后より詳西塚圓衛門重勝あり其門は葛谷傳七實順
 山本格安尾張の人其門は眞木新六明雅あり其門は
 齊藤九郎左衛門信芳あり池部清直の門は神谷保貞
 西村遠里福田展親青山信成芝田正虎川原美啟細野
 集宣あり小池友賢の門は近藤武大夫祐申字子巽榮
 初名右馬之助又武兵衛と云后中根法軸より大場大
 明和九年六月六日歿年四十八水府の士
 二郎景明字俊甫南湖或廉齊と号水府の士水戸彰
 二後致仕して大樂と号と天明あり此門は中野四
 五年五月二十三日歿年六十七
 方之進秀交字子穆初名久藏又仲衛門と云宗小澤多
 門政敏水府の士字叔道蘭江と号と景明歿後山路徳

のり中根元珪の子で中根保之丞法軸又名十字彦
て家學を受け長し歸京して江戸に至り建部賢弘及ひ久留
島義太師事し歸京して父の業で襲て銀局の史と
り寶曆十一年八月と云門人と幸田友之介親盈幕府と
月歿と年六十一と云門人と幸田友之介親盈幕府と
云其門より入江平馬脩敬又名脩字保叔龍渚或東河と
大輔の家今井官藏兼庭赤城と号と酒井雅樂頭の家
は仕ふ安永九年四月千葉陽生歳亂江戸の人皇和通の三
二十三日歿と千葉陽生歳亂江戸の人皇和通の三
氏あり今井兼庭の弟で今井兼之と云門人と荒井為
以幕府の御代齊藤順治正順江戸四谷新宿に住す本
多三郎衛門利明魯鈍齊又北夷齊号と加州侯と云利
明の曆象を脩し西洋航海の書で譯し其術を弘む其

門より奇士多く村田佐十郎光隆勢州津の藩士字不耀
父町見術最上徳内常矩出羽の産后幕府の士如响の祖
と指南と幕府佐々木喜兵衛紀州の西尾岡衛門喜宜州
左衛門の士佐々木喜兵衛紀州の西尾岡衛門喜宜州
勤む藩士支配勘定で永井右仲正峰本多政七芳信尾藩
士渡邊佐十郎幕府羽田平五郎の幕府横田小十助の幕府
九千五百及び其他會田安明日下誠坂部廣胖馬場正
督等始め皆ふ之に從學と云又水戸侯ハ其臣小澤
正容后とよ命江戸より來り利明は就て航海術で學
むしと云入江脩敬の門より中村安清龍溪と篠本守
典南濱と武田要四郎濟美青磯と号と井上喜平矩慶

肥後の人なり其門は牛島宇平太威庸字仲贊鶴鏗と号あり又久留島喜内義太始め江戸中橋に在り算法を指し南と後松永良弼の推舉に依りて内藤備後と云人有り始め算を知らず時算書一篇を視て一誦し悉く其義を知り不羈卓越の才を以て此道は獨通り徒衆最も盛んとして世人之で久留島流と云平方零約術及び古今通覽六卷より出づ處の角術は此人の發明より出ると云其門は田島庄五郎号黙軒と号あり江戸本所平野嘉兵衛あり山路彌左衛門主住君樹或は子と幕府の始り業を中根元珪より受け又久留島義太で師として後松永良弼より從ひ悉く三子の秘を受て

雄山の墓
江戸四谷
南寺西
麻寺に在

遺と処あり久留島氏の才ありと雖も其姓不羈よりと書て編述せし主任其緒言妙語を以て關氏の學よ合と此道は大成と之て關流の三傳とを其門は遊ふ人ぞ有馬中務太輔頼僮從四位少將筑後藤田權平定資又定賢初名彦太夫字子證雄山と号し山路主住の推舉に依りて久留米侯より仕ふ文化四年八月六日歿し十四年七安島萬藏直圓字伯規南山と号し出入江十太夫より受く寛政十二年四月七日歿し年六十江田栗田寺町淨林寺に葬る祖眞院智算量空居士と云新造安之戸坂善太郎保祐仙臺笹本吉太郎幕府の士勤吉田茂七郎石井郡之進雅頴思庵と号し江戸四谷法軸より小倉助左衛門雅久初名雅伴幕府の與力より致仕し

て文恕入江善太夫、船山善左衛門輔之後喜一人と云松
 永貞之丞貞辰、谷五兵衛后勇助又と云中人就く藤田
 安島の兩氏で關流の宗統とと宗統の外傳ハ一子と此
 の則久留米侯ハ匿名して拾幾算法で著し藤田定資
 ハ精要算法で著し而して後會田安明ハ義論數年で
 經て福成算法に至り數部の書で著し大ニ此道で振
 興せり又坂新藏正永麻田剛立と云人浪華ニ在て兩
 氏の討論を評折し二精評詮と云書で編述と山路主
 住の子で山路久次郎主長又名之徽字庭美鳳陽と号
 して久留米義太後と云其子で山路才助徳風と云
 以後父の業を嗣ぐ

其子で山路彌左衛門諸孝と云徳風の門で岡崎彦次
 郎義章字子文水府の士内藤小左衛門貞久字子恒水府の士小澤市
 次郎正容字子恭水府の士と云栗田安之ハ其學で古川山城
 守氏清幕府御勘定奉行で勤む後五位下ニ叙と文政
 町東淵寺三平六月十一日歿と年六十三江戶池端七軒
 平下總守忠和四品ニ叙と實ハ紀伊中納言宗高山圭
 璋幕府の士御勤むと云其子で古川新之丞謙春字君章芳
 天保八年六月二十と云其子で古川武兵衛又山明治
 一月歿と年五十五と云其子で古川幸太郎四と云又中根
 と年七十二と号と其子で古川幸太郎四と云又中根
 法軸の門で木村内匠芳隆京都の人開村井中漸京都

醫平山千里驥長崎の隠士と云中西流の算氏中村八左衛門政勝の派で直指鐘破流と称し又會田算左衛門安明字子貫始め鈴木と云人の羽州最上の産より始めて始り中西流の算法で岡崎安之と云人より受りて江戸に出て一家を立て自ら最上流と号し關流より抗して數部の論書で著し掃清算法に至れり強勉人より起へ千餘卷の書で編述し其門より從事より士に渡邊治右衛門一東嶽と号し市瀬長兵衛惟長慎齊と号し江戸本石町に住む九田源五衛門正通市野金助茂喬宮寺彌太郎一貞幕府の士御廣鋪添番と号し勤むと云渡邊一の門より佐久間空之丞質朴齊と号し奥州三春の

入り其子で佐久間二郎太郎續庸軒と号しと云又元録の頃宮城外記清行初め柴田理右衛門と云と云人あり之で宮城流の祖と云此門より宮本彌太夫正之あり其門より藤野彌之助美郷あり其門より北澤一郎右衛門治正あり其門より北澤千右衛門春實江戸中橋に住むあり其門より越野為之進義恭あり其門より和田新兵衛恭寛江戸中橋石川源太夫從繩屋鋪伊賀衆又浪華より宅間源左衛門と云人あり之で宅間流の祖と云其派より内田源兵衛秀富あり其門より妻野佳助重供共は天明年あり大坂京橋の組士と云人あり其五世に至り松岡良助能一大坂京橋の組士と云人あり

龍川文政
十一年七
月四日没
七

其門大に威人よりて高橋作左衛門至時大坂京橋の組士
后江戸に徴間五郎兵衛重富大坂足立左内信頭大坂
の組士最江戸松村佐兵衛俊平大坂の岡七兵衛之
只大坂の人四宮政吉順實大坂上町谷東平以燕備中大
森本定右衛門武恒河川瓜棚橋宗左衛門義方藩士
等皆其門に出つ其子で松岡常八清信と云藤田定
資の子で藤田權平嘉言字子彰龍川と号を始め早川
嘉三高寧字藏甫久留と云門人々神谷幸吉定令又名
藍氷号と幕府の士御普請役で勤む始り丸山因平
鈴木玄廣号と幕府の士御普請役で勤む始り丸山因平
良玄越後村上藩士後人江堀田仁助泉尹隠岐

開海大解
十一年八

守の藩士よりて小野捨五郎榮重上毛板鼻驛の人
幕府日官の属史久留米清水與市道香久留米八木林
城崎庄右衛門方弘久留米藩士
平質江戸菅野津太郎元健初め幸次郎と云幕府の士
石井大久保進号と幕府の士御普請役で勤む始り丸山因平
江戸大久保進号と幕府の士御普請役で勤む始り丸山因平
長上州上田法橋石田恒玄主郡の人
三郎清和江戸廻町横井丈右衛門時信字子珍幕府の
江戸目白丸山良玄門に出て木内斧次郎信安田
臺住とハ丸山良玄門に出て木内斧次郎信安田
堀池六太夫敬久勢州龜山關五太夫煙蓐信州小
昆野立右衛門良為号と齊ハ神谷定令の門に出る藤
田嘉言の子は藤田權四郎貞舛久留米の藩士
其

算法玉手箱
下之卷

月十六日
歿年四
十四

日下氏ハ
五瀬ト号
セ

門は花香傳右衛門下總の人あり永井正峰江戸湯の門は
高元吉常矩江戸あり西尾喜宜の門は北川禮左衛門
孟虎尾州の藩士近藤勝之右衛門實之尾州のあり皆
川甚平勝榮江戸青山の菅野元健の門は出づ嘗て説
く安島直圓ハ未だ皆傳で得ざるの時ハ在て孤背の
解術で作り其師主住ハ示も自他流を論せを圓理で
稱もりの此解ハ原因セざるハあり其他環圓整數
側圓等新奇玄妙の解術最も多し遂は關流宗統四傳
で得る其門は出る士で日下貞八郎誠字敬祖初ハ鈴
欽山の士齊藤豊軸の兄あり麻布日下窪町ハ住と云東
保十年六月三日歿と年七十六谷中天王寺多寶院ハ

葬坂部勇左衛門廣伴中藏と号と元幕府の士火消興
住と文政七年八月二十四日歿と馬場金之丞止督幕
の士江戸四谷ハ住と字董卿貞湖と号と天保十四年
閏九月十三日歿と谷南寺町木性寺ハ葬と
横井昌伯幕府の士云之で關流五傳とと横井昌伯の門
は平内八郎兵衛先胤江戸八丁堀ハ住と初あり其門
は齊春汀江戸八丁あり其門は家崎彦太郎善之又次
は云思山ハ号と江戸北八丁堀あり坂部廣伴ハ側圓
は住と谷ハ号と屋源兵衛と云と周背の術で發出と其門は川井越前守久徳幕府の士
奉行で勤む石井善藏保教江戸關ハ水菊間庄藏直
行清水幸次郎江戸四谷と云川井久徳の著述開式新

法ハ最も新奇の工夫又出馬場正督の子で馬場小太良

正統 錦江と号を幕府の士万延元年と云其門で岩田

驛輔政蕩岩田專平好算幕府日官の属史明治十高久

鎌次郎守静幕府飯河權五郎芥舟幕府鈴木六之助圓

幕府と云日下誠ハ關流の宗統で継ぎ安島師の遺稿

で校訂し不朽算法と著と其門は從事と人最も多

く溝口佐兵衛勝信長谷川善左衛門寛始ハ藤次郎と

下窪町又住と西番と号と天保九年十一月二和田圓

日歿と年五十七麻布芋洗坂龍興寺葬三月の藩

象寧初名豊之進后算學と更稱と元播州三日の藩

天保十一年九月十日白石八藏長忠始ハ横井時信と従

年六十七江戸四谷角筈新町多聞院葬ハ松樹院

右衛門利明始ハ彦兵衛理正と云石本姓又復と武州足

立郡梅田村と住と文小出長十郎脩喜阿州の藩士名

行政八年五月四日歿と云東都の算氏恒川徳高は學ハ浪

人十七日歿と年六十九阿州徳島寺町不破右門直温名

善學寺と始ハ家宗田彦左衛門宣貞又彦之助或彦之進

崎善之と學ハ家宗田彦左衛門宣貞又彦之助或彦之進

寄屋勤ハ麻布と住と初小泉六郎兵衛則之清水脚の

号ハ初ハ深津小御所猪之助安本尾州の藩士初ハ甚

又二年二月初ハ菊間直行と從學と文栗山庄兵衛徳一信

西條雅髮
と号と法
号ハ備院
極翁樂安
番士と云
和田氏の
墓白金堂

山記
法算
昭徳七
六

寄屋の墓
四谷南寺
明徳應寺
はり

算法
三十九

上田の中西金吾數邦幕府日官岡崎定五郎規逸幕府
 藩士望月藤右衛門富常初め鉄次郎と云江松永傳藏直英
 出羽新庄皆川利平次鈴木賢良長崎松山壽平美
 有馬郡松山庄三田は住と初め福井壽等より各近
 吉と云后内田恭及ひ和田寧は從ハ世の達士あり中へ就く和田寧子ハ方圓器理疊括の
 便表で創製し從來留滯より処の曲線周或ハ立体截
 割穿去の綴術數次を累るても自在に開除よりとて
 發揮を凡そ既往圓率で求る法ハ始め平圓で四分
 次ハ八分一次ハ十六分一逐て之で倍從し數萬分よ
 して其一分で求め之で累集して其積で得るで法と

右内后泉
と云明治

を昔時物徂徠の中根元珪と其法を論し徂徠ハ假令
 數百萬分の微少に至るとも數百萬の塵直線と曲線
 と生る積ありて必を密合せきりべとと云し元珪も
 其對へは屈せりと聞く今和田寧ハ此理を看破し無
 究に截割をり則ハ其數空に至るの理で發明せしよ
 り此法豁然として貫通をり至り是よりして方
 圓器理の術盛んに行われ白石長忠ハ社盟算譜で著
 と是則ち方圓穿去截割數理の著書の魁と其門で
 池田十左衛門貞一字純大旭岡し号木村定次郎尚壽
 江戸の人始め吉川氏と清水脚の士品井右内重遠字致脚湛々し号
 清の門竹井某と學ぶと始め小野榮重

十一月六日
月廿二日
癸卯年七
十五

學の上州安中の藩士原左右助賀度人初の板鼻野の
碓氷郡新井村に住す
重の横山善太郎春茂水と君樹中村幸助義古出石江
門人又云長谷川寛の教育の書を専らとし算法新
保の住す
書を著し圓理製表の術を略述し其子を長谷川善左
衛門弘以藤溪と号す維新と云西氏の著書最も多く其
門を千葉雄七胤秀一關の秋田十七郎太義幕府銀官
堂と平内大隅廷臣幕府御大工方の人梅坪と云村田佐
号と十郎恒光勢州津の藩士始め福田彦兵衛と云村田佐
裕仙臺の人錦内田半吾久命岳根の藩士山本安之進
賀前幕府の士日官の属史藤樹と小野友五郎廣伴常
州

笠間の藩士始め甲斐廣永の學ぶ東山と甲斐駒藏廣
号と常州笠間の藩大村金吾一秀江戸芝岡本彦次郎則
永士蕃山と号す宮本總左衛門重一柳河の佐藤虎三
録幕府の士住す宮本總左衛門重一柳河の佐藤虎三
神田區に住す宮本總左衛門重一柳河の佐藤虎三
良解記越後小千谷の野口丹七越後長岡と云内田恭
の關氏宗統六傳を受け其發明を處も亦多く其門
て竹内藤左衛門脩敬字子准思齊と号す始め御
要七章行上毛吾妻郡澤渡の人豫山と惠川彌太郎景
之紀州の藩士星舎と号す志野知郷字操大権山と号
之初め村田如訥と号す志野知郷字操大権山と号
野村渡貞處逸齊と号す小川金藏師房桑名の高木吉
兵衛信英越中富岳井牧太重賢白灣と号す高井重藤
山の人

算法正行首
下之卷
四十一

統善又親
成と号
明治十二
年一月廿
八日歿
七十七
橋龍持寺
内持慶院
二并

岡雄市有貞字子明 觀瀾の人徳久忠助知弘 字伯毅 徳久
和島桑本才次郎正明石川津和野の藩木村俊左衛門
林昱同藩南堆川北彌十郎朝隣立算堂と号と始め御
込區天野文次郎榮親寛始め長谷川彦坂規矩作範善
住と豊橋鳳導寺和十郎善小松式部惠龍無極と号と
三州豊橋島と云和田寧の門と細井源太郎寧雄遊壱人 后廣
御粥安本の門と平野萬一郎喜房字子泉 意山と号小
川重助定澄尾州のと云又關五太夫の門と竹内善吾
武信信州上山田の藩のり其子で竹内善次郎重信と云
門人を小林茂吉忠良信州小諸の人植村半兵衛重遠

全次名ハ
正乘技山
と号と
河田名ハ
保知熊谷
縣住
中村名ハ
時萬

信州上山と云小野榮重の門と齊藤四方言宣長字子
の藩士と云小野榮重の門と齊藤四方言宣長成旭
山と号と上毛群馬郡板井村の人弘あり其子と齊藤
化元年十月九日歿年六十一
長次郎宣義字算象 逐と云父子の門と市川玉五郎行
英南谷と号と上毛郡甘柳澤庄左衛門伊壽飯塚村の人
安原喜八郎千方武州賀美郡萩原禎助信芳字徳卿湖
上毛勢多郡中曾根慎吾宗郡漆原と号と上州碓あり
關根村の人松山壽平の門と佐藤全次撰州尼崎あり村田如訥の
松山壽平の門と佐藤全次撰州尼崎あり村田如訥の
派と柳方次郎猶悅豊田伊三郎勝義勢州津あり古川
氏清の派と久保寺院平正福河田彌一右衛門松田十
一郎中村岩見守日置孝忠各幕府小林六藏義湜幕府

日官の属史より明治十三年八月廿二日役を年四十三あり北川孟虎の門子宮田市十郎長善梅村玄共尾州のり近藤實之の門子廣江彦藏永貞美濃厚見の藩士とあり其子と廣江彦次郎永次岩城平と云門人と稲津彌五郎永豊美濃曾根村の人服部幸右衛門茂美濃苗部加藤佐藏利貞美濃加納驛の人と云昆野良為の門を水野六藏民興大垣の藩士と云其門子谷次郎八松茂美濃大垣船町判あり川北朝鄰の門子松岡三郎之敦幕府の士樋口藤太郎あり佐藤解記の門子村山禎次保信雪齊と号あり天野榮信の門子土谷温齊元豊國彌兵衛忠義あり長谷川弘の子と長

谷川善一郎廣明治八年大坂と云堀池敬久の子と堀池六大夫久道龜山の藩士と云小松惠龍の門子川上三九郎貴行共ニ遠州濱松の人あり其門を安間佐市好易と云貴行の子と川上三九郎知道と云惠川景之の子と關景尾紀州の藩士と云宮本重一の子と宮本河柳の藩と云坂正永の門子村井七兵衛宗矩大坂瓦町東横堀の角あり住と俗と云坂正永の門子村井七兵衛宗矩大坂瓦町東横堀の角あり武田篤之進り坂氏歿后會田安明後ふと云あり武田篤之進眞元大坂の人字子真空或無量齊と号村井宗矩の歿后坂正永の遺書と最上流の書と宗矩の嗣より受て之を研究一家を為と其嗣を武田録藏津輕弘前の人

元毛利惠助と云と云真元の門人秋田雄次郎伊任
山城の人岡田六兵衛忠貴大坂順慶町あり福田美濃正
復又名嘉當金塘或貫通齊と号と土御門家子仕ふ始
政五年七月九日歿と武田真元と号と後一家と為と安
撰州東小橋村傳光寺に葬るの嗣と福田直進徳弘
と云門人竹林兼吾忠漸佐野雍藏義致長谷川篤之
進嘉貞池田彌三郎正慶共大岩田七平清庸撰州麻
岩田量平幸通及ひ山本賀前高木信英と云其他江戸
又加藤武右衛門藤周赤羽根に住と河内善次郎高廣
幕府の住小泉村基之輔吉富阿州侯に仕と高橋恒三郎
四谷の住と云端然と号と元仙臺の藩に在ると同藩
元貞武田某と從と曆算と學ひ后幕府日官の属史と

り明治三年東京あり勢州と永田平助慎宇正美豊島
寶曆明和の頃江戸に住と算通と三藤明郷良顯羽州最
巻で著と圓理孤背の真術と記と越中と石黒藤右
意と撰て雲淵の弟子あり師の遺あり越中と石黒藤右
衛門高木村あり其子と石黒藤右衛門信基長と齊藤宣
と云門人と高木半兵衛后内田恭と云京都と池田恒
八三水尚齊小島典膳好謙濤山と号と阿州の産あり
講と榎豊後法眼東寺のあり加州と柴野擾次郎樽平
七保年間關口開荒尾岬あり防州と西田重次郎岩國
士天保あり北越と小林百喃惟孝今町漆の人后高
年間其孫と小林桂高田のと云筑前と松藤勢助の怡土郡

保年 長崎に木谷與一右衛門天保年間加悦傳一郎俊興字 殿あり肥後甲斐多喜次熊本藩士のあり上州中原豊太郎政安高遠藩士のあり尚と遺漏より人々逐次之を記載をべし又小出脩喜の圓理術で和田寧に受て圓理算經三卷を編述を其子と小出由岐左衛門光教徳藩士木姓北野小出家の嗣とあり明治九年十月十八日讃州高松に在て歿を年五十七巻國の本寺に葬ると云其子と小出壽之太徳藩士と云脩喜の門人と山本無一齊柳貞阿州山城上田雅助阿州北阿部雄助有清徳藩士日和佐良平徳藩士と云予も亦其負に加る而して漸次古人の積功に因り今哉此道大に庸け

より然るは從來ハ太平の餘澤に泥ミ古昔より算の唯高戸の業として世人其功用で知さるるが幸い又維新の期に遇い算の世用は關するの偉ありと知り之を修めり人も亦少ふくど加之西洋究理の説大に興り其學を講究する人最も多く輕重學の運動力より器械學の抗抵力等其他種々の利用を算定し遺漏なく各物を究理測量し其用の用するを修めりに至り遂に從來弊習の流派を破棄し此學一に歸し明治十年九月有司神田孝平君柳猶悦君在て東京昌平館に於て月次有志の人と會同し此道と講究するの盛

世に至れり

算學人名補遺

謙田俊清 享元の大坂の 間大坂の	藤澤武義 享元の大坂の 間大坂の
中村 享元の大坂の 間大坂の	川北 享元の大坂の 間大坂の
莞倉陽元 明和の戸の 頃江の	衢村重矩 大坂の内田 秀富の門
茶室金四郎 京都の文政の 間京都の	戸田久左衛門 京都の天保の 間京都の
土田元一 京都の折鍵屋と云 文政の	武田主馬 仙臺の藩士の 政年の
加藤政輔 京都の天保の 年京都の	山島大輔守良 京都の 都京の
川田彌一郎 保則の号梧岡下 保則の	川合平六祐貞 越後の今町の 林惟孝の門
佐伯義門 備中矢野の 備中矢野の	平松誠一信孝 備中矢野の 備中矢野の

金谷吉九郎 三州豊橋の 坂善の門	三輪弘忠 三州豊橋の 坂善の門
廣瀬祐貞 三州新城の 坂善の門	安倍喜兵衛延金 淡州須本
泉原準藏義信 大坂の 誠贊化	岸本島助増弘 大坂の
太田與兵衛明 至誠贊化 流幕府士	久保寺正之進正久 同上正
三浦華太郎教忠 同上	西村長左衛門知榮 同上
志村彦太郎昌義 同上	
本間平兵衛季隆 同上	伊藤信平 至誠贊化流
加藤良之進敬信 至誠贊化 流藩	金子半七郎 三浦教忠の門
恒川久右衛門徳高 宮城流 阿州	松峰覺 東京の人
帖環 字環中号思々齋大坂 文政年間洋算書を譯そ	

谷丹三郎 土州の門人 川谷貞六 土州の門人

片岡武次郎 土州の門人 細川半藏方郷 土州の門人

曾我部式部 京都 村林勘解申 京都

西村千助 京都 小西左仲 京都

安水傳吾惟正 字之供号格齊市瀬惟長の門人

安藤源左衛門ト信 始五良八と云後藤角兵衛の家人
后京都に住む

西村太冲 越中の人麻
田剛立門人

備考

安倍晴明 安倍家の孝元天皇の皇子大彦之命の末

仲磨の裔より大膳太夫益村の子より

華山帝之と土御門家の祖と

加茂保憲 加茂家の吉備大臣の末より幸徳井家

の祖あり

三善清行 延喜十八年十二月参議式部大輔三善清

行卒を年七十二淡路守氏吉の子より業

々巨勢文雄より受け博く経史より渉り旁ら

百家より通し法律より明かりより算術より精

く洽聞強記一時の宗師と嘗て菅原道真に退避を勧るゝ辛酉革命天數幽微吉凶の語を以てを而して后堀川は凶宅有て人之ゝ住して得も清行其宅を買い之は居と云清行恒は吉凶の説多くと雖も唯權貴を諫陳する具と吉凶の其人は在ると知其識見察をべし

關 孝和 關氏の系を探る人われり絶家として之を索るの由あり因て其實家内山家の系を擧げ考究の一助とす

清和源氏加賀次郎遠光の后胤笠原信濃守政長次男
大井五郎三郎長明四代目 内山源太郎永康

信州佐久間郡内山に住む之より世々内山を以て氏とす五代目の孫内山の城主なり

内山美濃守長邦

后清宗と改む天正十年徳川家康公甲州府中出陣の時徳川家も隨從を

初代 内山左京亮

大御番で勤む上州藤岡に於て百石と御藏米五十俵を賜り世々百五十石を領す寛永十六年御天守

番を勤む

二代

内山左京亮吉明養子

安間三右衛門國重嫡男

三代

内山七兵衛永明

内山七兵衛永明嫡男

四代

内山七兵衛永貞

内山七兵衛永明次男

内山七兵衛永貞弟

母内山左京亮吉明女

關新助 孝和

關五郎左衛門の養子と為る年月不存

内山家の世々今川小路に在て今々距四代前を
うせ々御鷹匠頭を勤む其子孫維新後下谷中御
徒町二丁目二十四番地に住し内山永茂と云
又内山氏の寶永の頃御代官手附を勤む寶永六
年の武鑑に出づ

關先生研幾算法跋の寫
明治十二年より百九十六
年前の書川北氏の藏本

跋

研幾算法門人建部氏賢弘所編也閱之悉發揮一理
貫通之妙旨矣寔解難之標準也凡數至直之道也毫
釐謬則差以千里焉頃年為邪說而惑世誣民之徒甚
夥矣學者當詳察而已昔天和癸亥七月下弦日書

藤原姓關氏孝和



關先生之墓 江戸半之七軒寺町

妙法

實永五戌子年

法行院宗達日心

靈

十月二十四日

位

俗名關新助孝和

關先生之墓

先生諱孝和號自由稱新助姓關氏本姓内山兩氏世仕縣官先生嗣關氏為人穎敏尤好數術老成嘗布算定以

為合先生年甫六歲僅見而舉其差衆皆歎服及長愈精天文律曆莫所不通時稱為算聖撰著數十種門人數百人書行人傳鬻乎盛矣寶永戊子十月二十四日殉葬于江戸半之七軒輪寺先生無子養姪為嗣稱新七久之嗣絕孫七盛業令聞日衰遂至不知其墓今茲齊藤正順本田芳信木村規房同過此寺遇斷表剝蘇而讀則先生墓也即同志八人合資建碑使余銘陰銘曰令聞既衰遺教猶存志士脩墓廢冢復原師弟之誠其德斯尊寬政甲寅十月望日江戸鳩谷孔平信敏撰向陵賀瑛之書

建碑

本多利明 横井包教 串原永峯 本田芳信

齊藤正順 村田光隆 小管正路 木村規房

麻田先生の碑銘 大坂天王寺町淨春寺あり

文中の曾弘中并竹山の子中并仙波多

寛政十一年五月二十二日剛立麻田君卒年六十六既葬其子直與其弟子間重富等買石誌其墓其友人之子曾弘爲之辭曰君諱采彰剛立其字原姓綾部豐後人自其祖父而下世仕并築疾君以支子家居嚴毅廉正精敏絕人最好星曆之學又喜醫方之言困苦勉勵二十餘年無所師受而大通其法明和末疾特命列諸侍臣從如大坂居一年遂如江都既歸歎曰星曆淵微豈有爵祿之累而能究焉哉且所以嗣祖先報君上有吾宗子在我復胡爲上書辭以聘之弗就縣官亦欲起之亦弗應輒曰我非棄君君我若後任舍舊君其誰氏之也在大阪二十八年而終星曆之法今古多端君自少包羅既盡而驗諸乎天有不合者乃知法之尚粗也悉捨其書別索其術一以測量實驗爲本或執器中庭露坐或操觚机上分號酷寒暑無有倦避頭不觸枕者九年其術用成然後優柔浸灌補綴磨礱者又十餘年凡其所驗無毫而君所發明論者悉與之符矣若西人嚮聞君之言而潤色之者也衆益服焉唯其消長求食二法實獨步今古雖西人不能至云豈方之書亦多端君自少包羅亦盡而常試諸乎人或得于其理而弗獲其功或獲其功而不得于其理輒歎曰獲其功而不得于其理我之不明也得于其理而弗獲其功是豈真得于理者乎哉亦我之不明也有斯事必有斯理我將深討務白竭于其理矣然星曆之勢是急未暇專致也晚節星曆業成乃曰我今則可以專及焉蓋欲大有所論者也而疾及之經以大故衆莫不惜爲祖父講道弘父諱安正妻藤井氏先沒無子取直以嗣三兄曰采胤曰采三曰采廣直實采胤之子系曰

麻田剛立先生之墓

本多北夷先生の碑 賀國河北郡あり

本田利明先生之碑

翁諱利明號魯鏡齊又號音羽先生生於越後而住於東都也精數學詳天文地理開西洋之學達渡海之法嘗應名來于藩居半歲許而復東都貢秀數會數談苟非方技之士其氣象才識世之所皆知也故不細記文政四年辛巳三月十六日以壽終於東都年七十有八無男有女子曰天津子等不堪衰惜故集其尺書建碑于河北郡瑞應山傳燈寺境內以達相識之情保定等聊報教育之恩耳故予雖不敏銘其碑陰銘曰

關 貢秀撰
宇野保定建
萩原秀庸之
近藤幸允
舟木種徳書

會田氏算子塚之銘 東京淺草觀音奧山子在 高五尺三寸 巾二尺四寸

會田先生算子塚銘

會田先生關東巧曆之巨擘而 本邦算氏之中興也文化十四年丁丑冬十月二十六日卒于東都儒居享年七十一歲矣墓在木所即現寺側門人別卜淺草觀音精舍之後山以盛先生平日所用之算子蓋不瀆手澤之存也先生諱安明字子貫號自在亭俗稱算左衛門姓會田氏出羽最上之產也先生幼就鄉里算氏其受數學以其天性捷悟精力有餘登已究天元演段之深理又探諸家秘願過極之後出東都廣訪算學有名士而試之無復足較吾伎者於是輕視當今術士闕其學於都下來問其術者曰衆先生嘗謂天元演段之方唯有衆法無除法則未足以發天元之妙數也乃殫思研精創意而開乘除互用以得矩合適當之方其術實古今算氏之所未發也因自命其術曰天生法遂建一家稱最上流云先生嘗語人曰吾天生法之術我得之於神夢之感通矣豈可不信耶其著書刊行于世者數十部其餘如擇登招差等發秘蘊者凡六百卷皆藏其家門人某等使余銘其塚余乃作諸以代銘其辭曰

識者作算神龍翔仰觀俯察極圓方太夫商高述其術經且受法制九章周官保氏教國子九千學僮課童程周斝指闕出聖作仲尼東萊繼標經秦燔典籍不師古六書九章紛搶勸夕策重綴尚新率閱悼天下盡湯々劉欽馬融雖精矣割裂之餘終難鄭後生還有傑出人中與斯學曰安明天資絕世強有力慧解神識抽群英天元演段折其哀神夢冥助證天生三寸算子窮塵劫一盤牙籌推荒紘精術已見健壯發神數或聞瘴鬼鳴天地妙數坐定之炳如列星麗纏焚千古流榮闈廓如復古正俗存典型觀音山中藥馬鬣手澤算籌謹深扁劇詩代銘表其阡永賴山靈呵護冢中祿光夜燭天何如精氣貫玉衡

文政二年著雍單闕冬十月 關東 鵬齋龜田興撰并書 廣瀨羣鶴

最上流元祖算學師會田算左衛門安明門人高弟

- | | | | | | |
|-----------------|--------|----------|--------|-----------|----|
| 奧州本松藩 渡辺治右衛門一 | 東都本所住 | 野間龜之助胤昌 | 同仙臺若菜住 | 齊源治 | 直正 |
| 東都野店藩 市瀬長兵衛惟長 | 大塚町住 | 村井七兵衛宗矩 | 同三春住 | 門馬金作得善 | |
| 同日官屬 市野金助茂喬 | 同南所住 | 中井帶力正輝 | 同石森住 | 佐久間空之丞正清 | |
| 越後新發藩 九田源五右衛門正通 | 肥後熊藩 | 烏田源吾泰喜 | 羽尾藩 | 平向守治右衛門貞利 | |
| 同 和田勝七郎富旦 | 羽前明住 | 内海與平治賀前 | 東都四谷住 | 渡辺整三郎教 | |
| 奧州弘前藩 石川元右衛門惟一 | 信濃善光寺住 | 岩下半藏愛親 | 信州松代藩 | 中島祐左衛門政昇 | |
| 東都四谷住 宮寺彌太郎一貞 | 越後新發藩 | 中野磯平保高 | 同 | 宮本市兵衛正武 | |
| 縣令屬吏 齋藤畠藏包徑 | 羽津内藩 | 菅原圓次郎惠地 | 東都淺草住 | 會田善左衛門安豐 | |
| 信州松代藩 町田源左衛門正記 | 奧州本松住 | 完戶佐左衛門政英 | 同三込住 | 渡辺啟次郎慎 | |
| 同 海沼與兵衛義武 | 同仙臺東住 | 津谷川準助清春 | 同淺草住 | 會田總太郎安重 | |
| 羽州雫藩 庄司伴藏久成 | 同關住 | 齊藤繁之丞尚中 | 同赤坂住 | 會田與一郎經豊 | |

仲
春
七
日
佐
郎
左
衛
尉
忠
平
文
平
大
人
德
九
右
兵
源
興
全
重
吉
字
要
大
人
宇
大
源
平
直
兵
左
帶
景
景
兵
十
右
新
小
文
長
良
因

附録

本朝算學書名誌 平次慶應三 前集

茲に録せしむる所の旨趣は古人教道の為めは苦心を以て其の著書の世は泯滅せんとて恐れ且に其名を存せしむる其書を探索し其時勢を知らざる亦便ありん哉と我見聞せしむる所書集おれしに余や短見にして加ふる老懶を以てせしむる所遺漏せしむる所多しん尚を前記を小傳履歷名誌の如き遺漏せしむる所多きて知と雖も暫く余が寸見を存せしむる所て擧げ他日同志の全書で編輯せしむるの一助を供せしむるのみ
凡そ有名の著書と雖も未だ彫刻を得ざる書名は茲に載せしむ

歸除法二

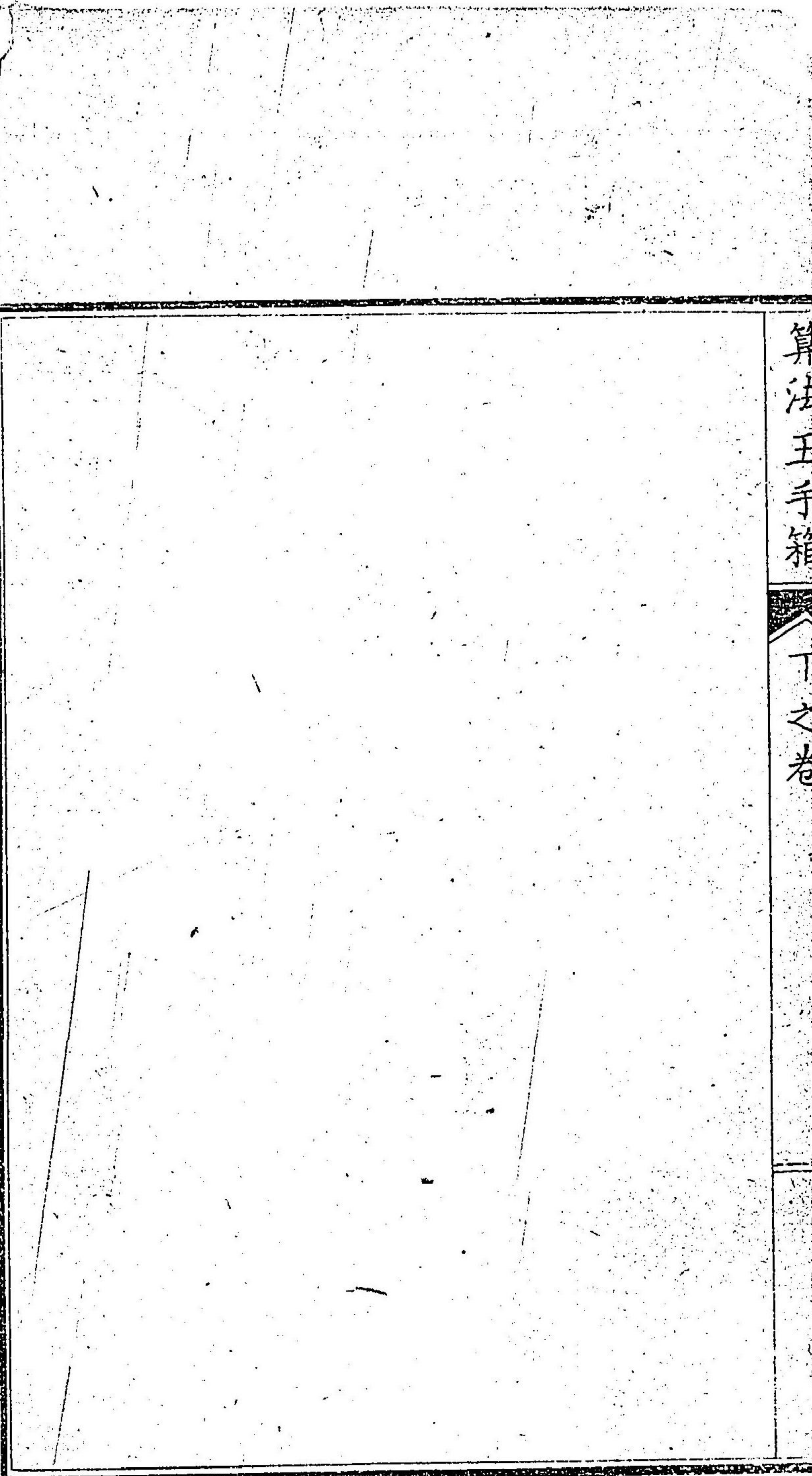
毛利出羽守重能作

新編塵劫記三

寛永

吉田七兵衛光由作

算法玉手箱
下之卷



前卷

五

欠

MISSING

附録 本朝算學書名誌 年次慶應三 前集

茲一録より処の旨趣ハ古人教道の為カキ苦心為キ処の著書の世ニ減
せんとして恐れ且ハ其名で存されハ其書を探索一其時勢で知ヌル亦使
あらん哉と我見聞ちる処で書集おれり余や短見よりして加るよ老
懶を以てされハ必也遺漏より処も多うらん尚を前記を小傳履歴名誌
の如きハ遺漏より処最も多きて知と雖も暫く余寸見は存する処で擧げ
他日同志の全書で編輯よりの一助は供るのみ
凡そ有名の著書と雖も未だ彫刻を得る書名ハ茲に載せり

歸除法二 毛利出羽守重能作

新編塵劫記三 寛永 吉田七兵衛光由作

因歸算二寬永十七 豎亥錄六寬文 今村仁兵衛知高著

龜井算三正保二 佐渡 百川忠兵衛

新刻算法記二承應元 泉州堺 田原仁右衛門嘉助

算兩錄三承應二 榎並 和證

改算記明曆二 山田 正重

商立因歸集二明曆三 高瀨 重次

圓方四卷記四明曆三 初坂宇右衛門重春

格致算五明曆三 算法圖解大全 地方細論集 柴村藤左衛門

四角問答三明曆四 中村與左衛門

算法闕疑秒五萬治三 同頭書貞享元 磯村喜兵衛吉德

改算記頭書六寬文 永持十郎兵衛

增補改算記大成三寬文二

算組五寬文三 算法直解 村松九大夫茂清

童介抄五寬文四 野澤 定長

算法根源記四寬文六 童介抄答 佐藤利左衛門正興

古今算法記六寬文十 根源記答 澤口三郎右衛門一之

算法發蒙集五寬文十 杉山善右衛門興治

勾股弦抄寬文十 算學啟蒙註五寬文十二 星野助右衛門寶宜

數學乘除往來一寬文十二 古郡彦右衛門之政

算法至源記五寬文十三 前田 憲郞

算法玉手箱 下之卷

算法級聚抄五元延宝

藤田伊右衛門吉勝

發微算法一延宝 ○古今算法記答術

關新助孝和

算法勿憚改五延宝 算法淵底記共延宝二

村瀨所左衛門義益

算法統宗訓十七延宝三

湯淺市郎左衛門得之

算九回三延宝五

野澤忠兵衛定長

算法入門二延宝八 算法明解三目○乘除往手○來答

佐治治郎右衛門一平

新編算數記七延宝九 算法改正錄宝永三 下京 醫師

奥田 有益

空一算學書三天和二

小坂七藏貞直

研幾算法一天和三 發微算法演段諺解四貞享二

算學啟蒙諺解大成七 建部彦次郎賢弘

算法發揮三天和

井關 知辰

勾股弦適等集三天和三

中西十太夫正好

同續適等集三貞享元

中西文左衛門正利

改算記綱目貞享四

湯淺 和黨

天文圖解五元錄

授時曆圖解五宝永

井口 常範

堅灰錄假名抄三

長慶宣明曆 安藤

有益

一極算法一元錄 ○六乘并京都の人疑らくん

演段也有益と同人あらん 安藤

吉治

明元算法元錄二 改算記綱目后宮城外記と称す

柴田理右衛門清行

古曆便覽備考四元錄五

苗村文伯 三徑

度量衡考三

弓祖孫 萩生總右衛門茂卿

七乘弁段二 元錄

律原發揮

授時曆圖解發揮四 室永

同俗解

皇和通曆三

三正俗解

改 正古曆便覽

天文圖解發揮三

算學啟蒙圖解發揮

中根丈右衛門元珪

當流算法重寶記

元錄

鈴木平三郎重次

和漢算法大成九

元錄

京都

宮城外記清行

算法天元指南

元錄

佐藤

茂春

數學端記五

后本姓復
山野家良と云

田中

佳政

數道初述前集三

元錄

山野唯五郎家良門人東房軒記之

括要算法四

室永
關孝和先生遺編
圓法真數之始

荒木村英檢閱 武江 大高由昌校訂

算法適等集四

中澤又助

圓說圖解二

尾州

伊藤平左衛門

極圓玉說

佐藤

真理勾股弦通術

一本勝右衛門

算法明備

岡島

友清

算法直解

樋口平兵衛

算鑄

算法率揮

地方算法記

同續編

栗田處助

算學問答

透空

算元記三

京都

藤岡

茂元

算法一起五

方田秘見集三

不求算

算法大全五

早算用

塵劫記新板

三切

塵劫記頭書

改算塵劫記

同圖解大成

改算智惠袋

改算智惠車

算法智惠鑑

算學智惠海

久用早算

塵劫記智惠寶珠

廣益塵劫記

同大成

懷寶塵劫記

改算重寶記

算法指南車

大廣益世界玉

万代塵劫記

右二種八年次及び作者の姓名詳くありき

算法智惠寶

雲箋堂

算法智惠輪

青竹堂

算法早傳授

環中仙八三

算法位法要略

佐竹

十露盤師匠不入

服部勘助

算法初心大成

友求子

疊算合歸的

千種

扇面八算見一

扇面相場割

兼割

運氣算法三

香月牛山

漏刺說

櫻井養仙

算法玉手箱

五十九

算法樵談集四 中村八左衛門政勝

天文義論二 正德 日本水土考 西川 如見

算法天元錄五 正德 西脇 利忠

下學算法一 正德 ○樵談集答術 島田尚政編門人穗積伊助與信

具應算法五 享保 三宅与四左衛門

中學算法一 享保 下學答術 江戸 青山 利永

勾股致近集 享保 若杉多十郎

算法弧矢弦解 井上 嘉林

規矩分等集二 享保 觀農固本錄二 丹州 篠山 萬尾六兵衛時春

天經或問 訓點 四 享保 町見辨疑五 西川忠次郎正休

量地指南三 享保 十八 同後編五 寬政 規矩元法五 勢南 處士 村井 昌弘

算法志元錄五 藤井長兵衛要本

竿頭算法一 元文 三 勤者御伽草紙三 寬保 中根安之丞彦循

算學便蒙三 元文 三 中尾 齊政

萬寶塵劫記 元文 三 石川 流宣

探玄算法一 元文 四 天經或問註解 入江兵庫脩敬

角總算法 寬保 三 章可入庸昌

開承算法一 寬保 ○竿頭答 池部 清真閱

算髓 竿頭 答術 鷄助算法 便蒙 答術 合卷一 延享 遺塵算法二

算學名義集 羊棗算法 尾州 山本武兵衛格安

開宗算法二

字子和 葛谷傳七 實順

闡微算法一 延享 〇 開承答

武田要四郎 濟美

算法演段指南二 寬延

美濃 河端道 碩祐著

算用手引草一 宝曆

内田源兵衛 秀富

算法指掌大成五 宝曆

水戸 石山彦右衛門 正盈

小學算法

算法演段拾遺

奥村三助

明法算法一 明和 〇 探玄答術

赤城今井官藏 兼庭撰 迷阿人 荒井為以

拾機算法五 明和

久留米侯 〇 匿名 豐田光 文景

民用晴雨便覽二 明和

風雨賦國字解二

曆學法教言五

京都の人 敬房と云 中西宇兵衛 如環

算學津梁二 明和

津久井 義牟

開商點兵算法二 明和

算法童子問五 天明

度量微

村井中漸

算法得幸錄二 安永

岸 與三 左衛門 通昌

算法少女三 安永

大坂の人 后江戸日 住モ醫師平氏の女。編 壺中隱者 貴老子 常閱

數學松社編一 安永 勾股捷徑

安永 讃州 〇 人 多田 弘武

早算手引集 安永

山本一二三

大學指要四 安永 數度霄談四 安永

西村遠里 居行子

算法樵談集九問之答術 安永

山田 刑石

勾股派源

安永八

岩本

梧友

精要算法三

安永八

改正天元指南五

寬政四

藤田權平定資

田錄圖經二

陰山

元質

算學鈞致三

越中

石黒藤右衛門

授時曆諺解七

石州

竹山

本朝天文七

京都

馬場

信武

天文指南五

算法學海

坂新藏正永

當世塵劫記一

天明四

改精算法一

天明五

改精算法改正論一

天明六

解惑算法一

寬政二

算法廓如

寬政七

算法非撥亂一

寬政十三

算法古今通覽五

寬政七

算法天生法指南五

會田算左衛門安明

利得算法記大成

天明四

中西

志水裡町齊藤貴林

非改精算法一

天明六

解惑辨誤一

寬政元

撥亂算法一

神谷幸吉定令

神壁算法二

寬政元

再訂算法一

寬政九

續神壁算法一

文化三

掌中勾股要領一

藤田門彌嘉言

算數二

寬政元

平山千里

算鱗

寬政三

常陽

稻垣豊強子剛甫

訓蒙天地辨三

寬政四

江戸

周脾算經註解五 寬政 尾州

峽算須知一 寬政 甲州一圓の 要記を 井上間倫諸

算學小筌二 寬政 續算學小筌一 文政 七 牛島宇平太盛庸

繪本工夫之錦三 寬政 十 船山喜一輔之

算法點竅指南三 文化 七 大原勝右衛門利明

度量衡說統 文化 元 最上徳内常矩

開式新法二 文化 二 川井越前守久徳

算法誓古大全一 文化 五 松岡良助能一

天文成象之圖一 長赤水

點竅指南録十五 文化 七 海路安心録二 文化 十三 坂部勇左衛門廣胖

五明算法前集二 文化 十一 同後集二 文政 九 家崎彦太郎善之

算法發隱 文化 十二 北川禮左衛門孟虎

渾天新詔二 京都 河野主計助

孤矢弦叩底二 文政 元 美濃 鹿野權律師忍澄

曆學疑問三訓點 文政 三 星圖步天歌 陰陽頭安倍晴親

算法變形指南一 文政 三 算法直術正解一 天保 十一 匠家矩術要解

匠家矩術新書 后平内大隅 七 改称モ 福田彦兵衛廷臣

階梯算法三 文政 三 算法便覽七 文政 七 提要算法一

真元算法四 天保 十五 大坂 武田主計正真元

本朝算鑑 二天作 最上流 安永傳吾惟正

大日本實測繪圖 文政 伊能勘解由忠敬測定

觀象圖說 四

方圓星圖 一文政 備后福 石坂 常堅

社盟算譜 二 九文政 白石八藏 長忠

溫知算叢 一 十一文政 木村定次郎 尚壽

算法雜俎 一 十三文政 算法圓理冰釋 二 七天保 崑井右内 重遠

點竄初學抄 一 十三文政 池田十左衛門 貞一

祠利區揭算法 二 十三文政 一名算法奇賞 馬場小太郎 正統

地震考 一 十三文政 佛國曆象編辨妄 一 小島曲膳 好謙

算法新書 五 十三文政 長谷川善左衛門 寬總理

新編弧背術 一 二天保 岩田權左衛門 廣成

要妙算法 七 二天保 揭摺算法 二 七天保 堀池六太夫 敬久

古今算鑑 二 三天保 內田彌太郎 恭

算法側圓詳解 二 四天保 算法橢圓解 二 十三天保 量地手引草 一 六嘉永

算方地方指南 村田佐十郎 恒光

續神壁算法起源 二 四天保 廣江彦藏 永貞

割圓表 三 四天保 奧村基之輔 吉富 閱

算法圓理鑑 一 五天保 算法圓理新々 一 十天保

數理神扁 一 萬延 圓理起源表 齊藤長次郎 宣義

合類算法 一 六天保 市川玉五郎 行英

算學速成五天保六 量地心計示蒙一 算法雜解四天保十四

算法道標二 福田美濃 正復閱

算法必究一天保七 量地弧度算法三 奧村喜三郎 清和

算法瑚璉二天保七 小林茂吉 忠良

豁機算法一天保八 志野 知卿

算法地方大成五天保八 算法極形指南 秋田十七郎 義一

算法地方大成斥非問答一 栗田彦右衛門 宣貞

尺×仕出一天保九 東海道 中仙道 里數早算用一嘉永四 岩田量平 幸通

算法淺問抄二天保十 御粥猪之助 安本

探曠算法一天保十一 算法開益五嘉永元 量地圓規方成二嘉永六

算法約術新編三文久二 劍持 要七章行

照暗算法五天保十二 榎豐 後法取

算法通書三 算盤指南一天保十三 算法近道 長谷川善右衛門 弘閑

算法助術一天保十二 大全塵劫記二同三 點竄手引草初編三

點竄手引草二編三天保十二 山本安之進 賀前

量地圖說二 算法通解 甲斐駒藏 廣永

弧三角捷法解一天保十三 乘除對數表一安政四 惠川彌五郎 景之

算法求積通考五弘化元 內田半吾 久命

算法對數表一弘化元 小出長十郎 脩喜

算法圓理通一弘化

藤岡雄市有貞

算法整數起源抄二弘化

菊地宇太之丞長良

摘要算法八弘化

岡田六兵衛忠貴

算法圓理三台一弘化

佐藤虎三郎解記

曆引二訓點弘化

波川助左衛門佑賢

順天堂算譜二弘化 談天六訓點文久

福田理軒 泉

算法圓理括發二嘉永

竹内藤左衛門脩敬

算法圓理括囊一嘉永

加悅傳一郎俊興

町見術阿弧丹度用法一嘉永

渡辺 以親

當用算法一嘉永

佐久間次郎太郎續

算法光圓豁通二安政

桑本才次郎正明

籌算捷法一安政

鶴峰 季尼

測量集成十五安政 西算速知二安政

花井喜十郎健吉

算法利足速成四安政

嵩田七平清庸

洋算用法一安政

柳河春三 嗽

輿地全圖一文久 和洋時辰儀比較表二慶應

佐藤與之助政養

算法方圓鑒二文久 算法圓理私論二慶應

萩原禎助信芳

通機算法一文久

村山禎次保信

算法追遠發蒙一文久

安間 好易

淺致算法一文久

平野萬一郎喜房

籌算指南

千野

乾弘

量地三略

二 慶應元

荒專

八 至重

增補當世改算記整數起源抄合卷

一 慶應二

金子

昌良

筆算提要

一 慶應三

伊藤慎藏君獨

圓理規矩算法

二 天保七

圓理如意算法

正空覺道門人武田信昌

分野星圖一卷

二 嘉永

洪川助左衛門景祐

和音通算法玉手箱卷之下 終

花井

靜

再訂

算法玉手箱跋

此編係家大人二十年前之作一時矢口而發者社友鯤齊輯錄之瓦玉俱藏題以玉手函今應書肆之需校正補綴以命鵠顧夜光之珠愚者惟焉楚山玉識者寶焉而為瓦為玉或性或寶者在看者之如何耳

二千五百三十九年一月福田半識於東京順天求合社之南窓

和洋普通算法玉手箱附錄

本編上卷より可除諸數の除き盡すべき數を索る法

一二々載ると雖も今亦新考の通術あり茲に録を

○全數尾位の數字を取り其倍數を乘り以て前位の

數に加減し除數單位の三と九ハ其數を除數よて除

き盡すべき則ち全數必を其除數で以て約するを得

得へり

○一個で置き除數三の倍數より二個で置き除數七

の倍數より各三個で加へ四と五四で除數十三の倍

數より五で除數十七の倍數より又各三個で加へ七

八〇七で除數廿三の倍數と一八で除數廿七の倍數
 一〇又各三個で加へると十一で除數三十三の倍
 數と一十一で除數三十七の倍數と一逐て此の如く
 三個で累加し逐次は除數尾位三と七の倍數で得ル
 〇一個で列し除數九と十一の倍數と一一個で加へ
 二と除數十九と廿一の倍數と一一個で加へると
 除數二十九と三十一の倍數と一一個で加へると
 除數三十九と四十一の倍數と一逐て此の如く一個
 で累加し逐次は除數尾位九と一の倍數で知る
 左に得る處の倍數で表を〇符の成合數よりして精數
 の順次よりして精數

倍數減	除數	倍數加	除數	倍數	除數	倍數	除數
一	11	一	9	二	7	一	3
二	21	二	19	五	17	四	13
三	31	三	29	八	27	七	23
四	41	四	39	二	37	一〇	33
五	51	五	49	四	47	三	43
六	61	六	59	一七	57	一六	53
七	71	七	69	二〇	67	一九	63
八	81	八	79	二三	77	二二	73
九	91	九	89	二六	87	二五	83
一〇	101	一〇	99	二九	97	二八	93
一一	111	一一	109	三二	107	三一	103

假令ハ全數四千零三十七あり除數十一まで除をベ
 き哉否哉で試るよハ11の倍數ハ減りて一あり故

全數の尾位七を一倍し前位の數字四零三の内減
 一三九六とあり之を十一よて除く則ち除き盡るお
 り故に全數四千零三十七の十一よて約し得へし
 又全數六万八千三百五十三あり除數廿九を以て約
 し得るや否やを試るよへ 29 の倍數を加よして三か
 り故に尾位を逐次三倍し
 加へ上式の如く一廿九を
 以て除き盡るあり因て全
 數六万八千三百五十三の
 必を廿九を以て約し得る

$$\begin{array}{r}
 6835 \overline{) 3} \\
 \underline{9} \\
 684 \overline{) 4} \\
 \underline{12} \\
 69 \overline{) 6} \\
 \underline{18} \\
 8 \overline{) 7} \\
 \underline{21} \\
 29 \overline{) 29} \quad (1 \\
 \underline{0}
 \end{array}$$

明治十二年一月廿八日版推免許
 三月 出版 定價四十五錢

東京神田區中猿樂町四番地
 東京府下平民
 編輯兼 出版人 福田理軒

湯嶋松住町四番地
 同
 發兌人 別所平七

年表 三下首 下二卷

は全数の尾位七を一倍し前位の数字四零三の内減
 し三九六とあり之を十一よて除く則ち除き盡るか
 り故に全数四千零三十七を十一よて約し得へし
 又全数六万八千三百五十三あり除数廿九で以て約
 し得るや否やで試るよは29の倍数を加よして三か
 り故に尾位で逐次三倍し
 加へ上式の如くし廿九で
 以て除き盡るより因て全
 数六万八千三百五十三は
 必も廿九で以て約し得る

$$\begin{array}{r}
 6835 \overline{) 3} \\
 \underline{9} \\
 684 \overline{) 4} \\
 \underline{12} \\
 69 \overline{) 6} \\
 \underline{18} \\
 8 \overline{) 7} \\
 \underline{21} \\
 29 \overline{) 29} \quad (1 \\
 \underline{0}
 \end{array}$$

明治十二年一月廿八日版権免許
 三月 出版
 定價四十五錢

編輯 兼 出版人 福田理軒
 東京神田區中猿樂町四番地
 東京府下平民

發兌人 別所平七
 湯嶋松住町四番地
 同

全書三十一頁
 池之端作
 明治十二年一月廿八日

普通測算學校

東京神田區中
猿樂町四番地

順天求合社

學課著書

筆算入門初帙

加減ヨリ按分
比例地方求積

同二帙

関平ヨリ
代數用例

同三帙

代數方程式
ヨリ不定數

筆算入門四帙

幾何画法
ヨリ双曲線

筆算入門例題五冊

追々出版

筆算通書六冊

加減乘除ヨリ分數諸比例平方代
數一元二元方程式不定數諸例
法合名法諸級數等ノ説明シ

測量新式三冊

代微積拾級譯解一冊

洋算例題續編

算學生徒心得一

明治塵劫記大全六

順天堂算譜二冊

算學速成一冊

測量集成十冊

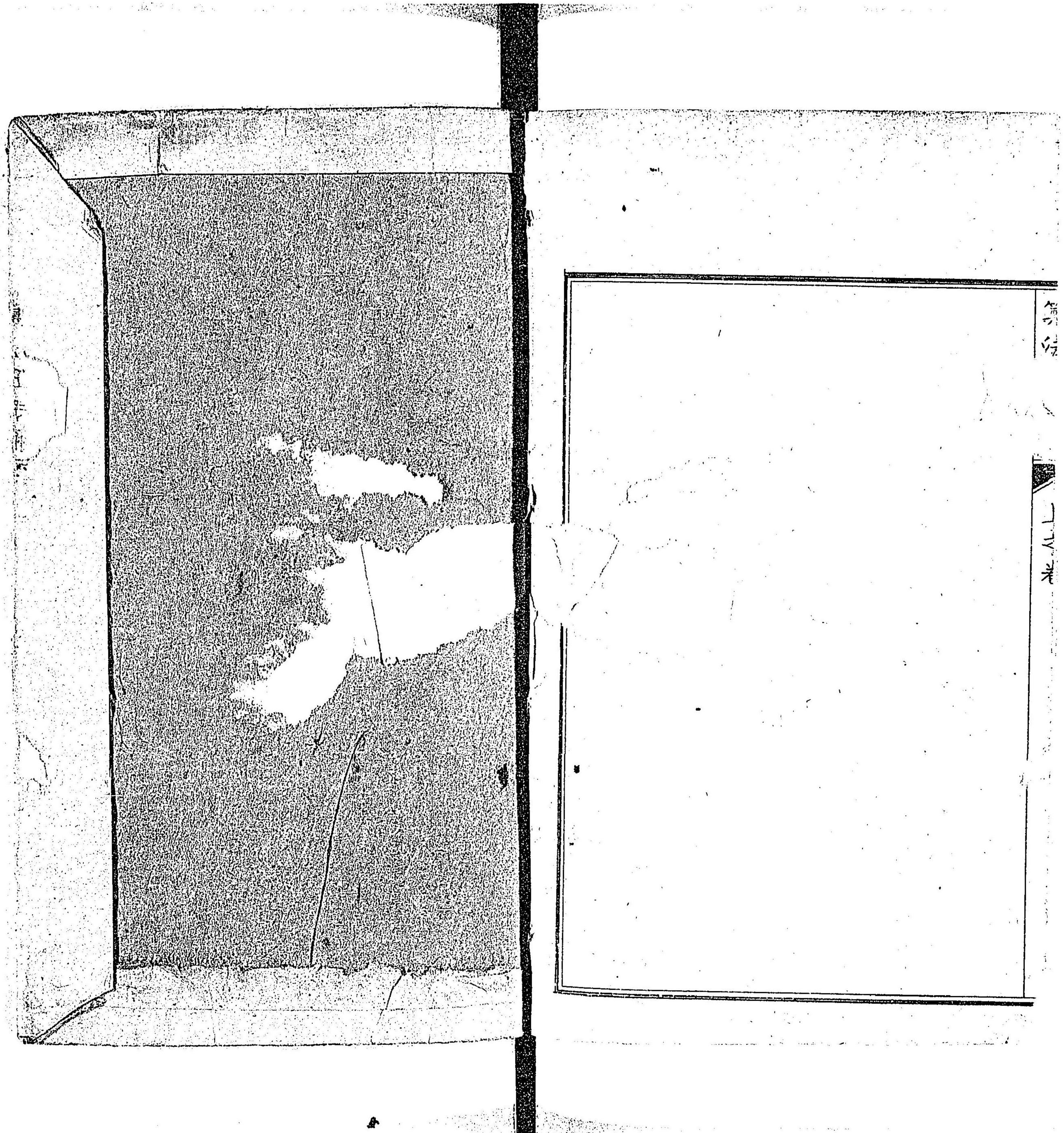
談天六冊

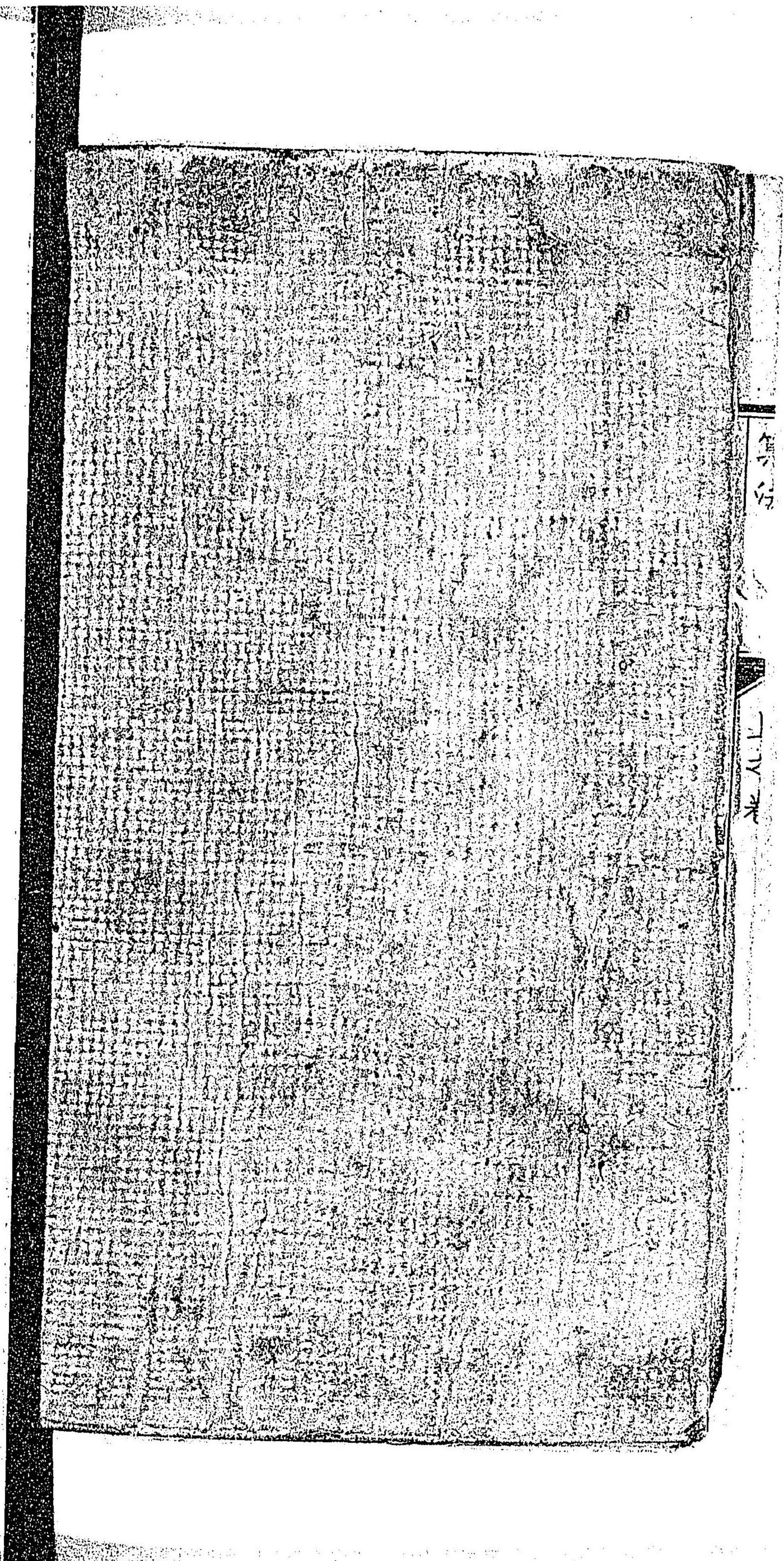
太陽曆俗解二冊

發兌

書林

全	大坂心齋橋北筋	河内屋喜兵衛
全	東京日本橋南壹丁目	敦賀屋九兵衛
全	全 二丁目	伊丹屋善兵衛
全	全 角	須原屋茂兵衛
全	芝大神宮前	山城屋佐兵衛
全	全	須原屋新兵衛
全	横山町壹丁目	和泉屋吉兵衛
全	全 三丁目	和泉屋市兵衛
全	淺草茅町三丁目	出雲寺萬次郎
全	神田末廣町	和泉屋勘右工門
全	淺草清島町	須原屋伊藏
全	神通油町	英 文 藏
全	池之端仲町	福田屋勝藏
		藤岡屋慶次郎
		岡村屋庄助





卷之六

目錄